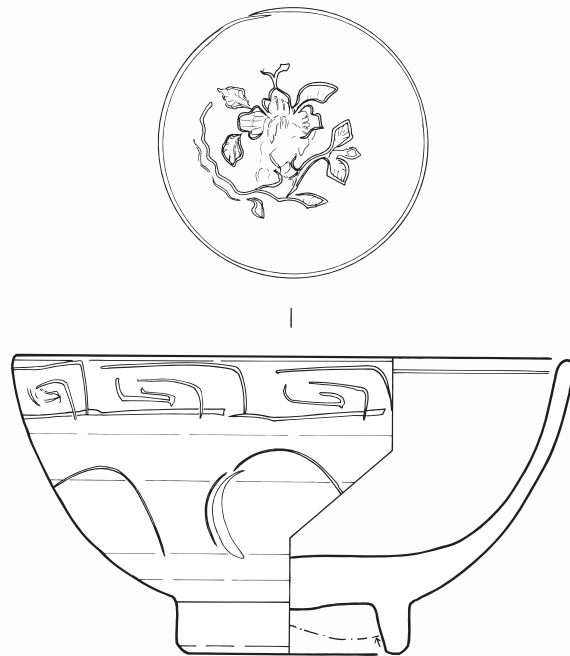


今帰仁村文化財調査報告書第28集

今帰仁城跡周辺遺跡Ⅳ

— 村内遺跡発掘調査報告 —



2010年 3月

な き じん
沖縄県今帰仁村教育委員会

今帰仁村文化財調査報告書第28集

今帰仁城跡周辺遺跡Ⅳ

－村内遺跡発掘調査報告－

平成22年(2010) 3月

な き じん
沖縄県今帰仁村教育委員会

序

本報告書は、平成19年度から平成21年度までの「村内遺跡発掘調査事業」に伴って実施された今帰仁城跡周辺遺跡の範囲確認調査の成果をまとめたものであります。

本村には国指定史跡今帰仁城跡附シイナ城跡が所在しております。これまで今帰仁城跡の整備事業を昭和55年より進めてきました。平成12年12月には今帰仁城跡を含む県内9遺産とともに、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として今帰仁城跡が世界遺産登録されました。これを契機に様々な調査が行われる中、特に周辺地域においてこれまで知られていた文化財の内容が明らかになるに従い、当該地域の重要性が再確認されてきております。

村内遺跡発掘調査事業では主に、これらの今帰仁城跡周辺遺跡の調査を進めてきておりまして、その成果を受けて平成21年7月には城下北側に広がる集落遺跡が、さらに平成22年2月にはシイナ城跡が新たに史跡地域として追加指定され、史跡面積が約29.3haとなり、県内でも最大規模の面積を誇る史跡となりました。

本報告書では、今帰仁城跡周辺で確認された遺跡の内容を把握する上で参考になる試掘調査の成果、あるいは表採遺物の報告を紹介しております。本報告書が、今後実施される今帰仁城跡の調査研究の基礎資料となることを確信するとともに、保存活用に資する上で参考資料となれば幸いです。

最後に、これまで調査にあたっては貴重なご指導を賜りました文化庁文化財部記念物課、沖縄県教育委員会文化課、沖縄県立埋蔵文化財センターをはじめ、調査を指導していただいた今帰仁城跡調査研究整備委員の先生方に心から御礼申し上げます。

平成22年3月

今帰仁村教育委員会
教育長 謝花 弘

例 言

1. 本報告は、今帰仁村教育委員会が、国・県の補助を受けて、平成19年度～21年度に実施した「今帰仁村内遺跡発掘調査事業」で、2007年9月19日～2007年10月10日に実施した「周辺遺跡第13次調査（親泊ムラ跡試掘調査）」の発掘調査、2007年12月1日～2007年12月28日に実施した「周辺遺跡第14次調査（志慶真ムラ跡試掘調査）」の発掘調査、2008年8月1日～2008年8月14日に実施した「周辺遺跡第16次調査（ナガレ庭遺構調査）」の測量調査、2008年12月1日～2008年12月12日に実施した「周辺遺跡第17次調査（今帰仁ムラ跡13区試掘調査）」及び2009年8月1日～14日に実施した「周辺遺跡第18次調査（第6号石積み遺構〈チンマーサ〉）」の測量成果を主に収録したものである。
2. 発掘調査、資料整理等で次の方々のご指導、ご協力を得た。記して謝意を表する。
植物遺体に関する指導：千田寛之（札幌大学古食性分析室）
その他遺跡全体の調査に係ること：安原啓示（今帰仁城跡調査研究整備委員長）、富田裕次、赤嶺和雄、上原静、渡辺美季、高橋誠一、田中哲雄（今帰仁城跡調査研究整備委員）
発掘調査等に当たっては本中眞（文化庁記念物課）、坂井秀弥（〃）、瀬田佳男（〃）、三宅克広（〃）、島袋洋（沖縄県教育庁文化課）、瀬戸哲也（〃）、伊禮良栄（〃）ほか多くの先生方からご指導ご鞭撻いただいた。記して謝意を表する。
3. 発掘調査は今帰仁村教育委員会によって実施された。本報告の執筆は下記の5名あたり、もくじに文責を記した。なお、陶磁器の分類と本書の編集は金武の指導のもと玉城・宮城が中心となって行った。
金武 正紀（今帰仁村発掘調査アドバイザー） 宮城 弘樹・玉城 靖（今帰仁村教育委員会文化財係）
與那嶺 俊・黒沢 健明（今帰仁村教育委員会文化財係臨時職員）
4. 本報告で用いる出土遺物の分類については、既刊の今帰仁村教育委員会発行の報告書分類を用いている。陶磁器は基本的に瀬戸ほか2007の分類に従い、適宜既刊の報告書における分類との関係を明示している。主郭分類という場合には主郭報告書の分類（今帰仁村教育委員会1991）を引用している。
5. 資料整理は下記のメンバーで行った。
上間 恵子 松本 綾子 山城留利子 島袋 滝子 新垣あゆみ
玉城 亜紀 玉城 静香 神山知枝子 有銘 倫子
6. 現地での写真撮影は、玉城、與那嶺が担当した。遺物の撮影は玉城、仲村善洋が担当した。
7. 出土遺物と発掘調査に係る資料は全て今帰仁村教育委員会において保管する。
8. 報告書の引用・参考文献は巻末に収めた。

も く じ

第Ⅰ章 遺跡の立地と歴史的環境 (玉城 靖)	
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第Ⅱ章 調査に至る経緯と概要 (玉城 靖)	
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査組織	5
第3節 発掘調査の経過	6
第Ⅲ章 報告 (宮城 弘樹・玉城 靖・與那嶺 俊・黒沢 健明)	
第1節 今帰仁ムラ跡 (13区)	10
第2節 親泊ムラ跡	13
第3節 志慶真ムラ跡	17
第4節 今帰仁城跡周辺遺跡表採遺物	23
第5節 石積遺構の調査	24
第Ⅳ章 今帰仁城跡主郭東側斜面出土の植物遺体 (千田 寛之)	31
図 版	39
第Ⅴ章 結 語 (玉城 靖)	50

第Ⅰ章 遺跡の立地と歴史的環境

第1節 地理的環境

沖縄島は南西諸島のほぼ中央に位置する。東を太平洋、西は東シナ海に面し近海を黒潮が流れ、海洋性、亜熱帯の島として豊かな自然に恵まれている。

今帰仁城跡はこの沖縄島にあって、行政区は今帰仁村に所在する（第1図）。今帰仁村は沖縄本島北部、本部半島の北側に所在する人口約9,500人の自治体である。今帰仁城跡は今帰仁村の中でも西端、字今泊に立地している。城地の立地する丘陵は標高約100mを計り、丘陵頂部の主郭・御内原からの眺望は広く、北に伊平屋・伊是名島、与論島を望むことができる良所にある。今回の調査地の今帰仁城跡周辺遺跡は、城跡北側緩斜面一帯に今帰仁ムラ跡・親泊ムラ跡が、南側に志慶真ムラ跡が隣接する。

さて、今帰仁城跡周辺地域の地質・地形的には、今帰仁城跡と同様で今帰仁層群と呼ばれる硬質の石灰岩を基盤としている。城は先に述べたとおり標高100mの丘陵で、この丘陵の東に志慶真川が流れ、城の防御線として有効に利用されるとともに、川は東シナ海に注ぎ大きな河口をつくっている。同様に西側はタキンチャガーラが流れ、河口には港の名残を残す地名として地元では「ナートゥ（港・湊）」と呼称している。この両河口に挟まれるように展開する海岸沿いに、字今泊の現集落が伝統的な景観を今に残している。今泊はかつて親泊と今帰仁の二つのムラが合併した経緯があり、両ムラより一字ずつ取って今泊としている。



第1図 今帰仁城跡位置図

第2節 歴史的環境

村内にはおよそ40余の先史遺跡が確認されている（今帰仁村教育委員会1984）。現在知られる村内の最も古い遺跡は沖縄編年前Ⅳ期（縄文時代後期相当）に位置づけられる運天貝塚や古宇利原A遺跡などがある。先史遺跡の多くはどれも海岸線沿いに点在し、本格的に内陸部に人が展開するようになるのはグスク時代からのようである。

今帰仁城跡は本島北部最大の城郭で、その城郭周辺には集落遺跡、拝所、御嶽、石積み遺構などが展開する。今帰仁城跡周辺遺跡は今帰仁城跡を中心にその周辺地域に展開する関連遺跡群の総称である（第2図）。中心となる今帰仁城跡は今帰仁村大字今泊小字ハンタ原に所在し、城郭の面積は約4haの広さを持つ大規模なグスクである。

今帰仁城の歴史については、琉球が三つの勢力に分かれていた、いわゆる三山鼎立時代に山北（北山）として、中国明代に琉球国中山王、山南王とともに記録に登場する。『明実録』太祖實録巻158・洪武16年12月庚午朔（1383年12月15日）「琉球國山北王帕尼芝、遣其臣摸結習、貢方物。賜衣一襲。」と記され、山北王「帕尼芝」の名称が記述されるのを似て、史料上の嚆矢とする。以後記録によれば、最初の1383年から最後の1415年の33年間に山北王・帕尼芝が6回、山北王珉が1回、山北王攀安知が11回、中国皇帝へ使者を送り朝貢貿易を行ったことが記されている。この時代山北は沖縄北部地域と奄美大島近隣まで領域として支配していたと言われている。

しかし、その山北（攀安知）も本島内で急速に勢力を拡大する中山王尚巴志によって1416年（1422年の和田説もある）に滅ぼされてしまう。中山の山北平定後、城地には中山によって中山王の子弟や重臣を山北監守に任じ、沖縄本島北部を管理下においている。これは1665年に監守体制が廃止されるまで続く。この間のことを監守時代と呼んでいる。この監守時代に当たる1609年には薩摩軍による侵攻を受け、これを契機として廃城になったと考えられている。

さて、この今帰仁城跡の周辺にはミーミングスクなどの石積遺構が点在し、いずれも城となんらかの関わりのある施設と考えられている。また、今帰仁、親泊、志慶真の各集落遺跡は城下町的な集落として展開していたことが伝承されていた。今回これらの各集落遺跡の実態把握のため、それぞれの遺跡において狭小であるが試掘調査を実施した。地下に残る遺構や文献記録、伝承以外にも集落の故地を伝える「阿応理屋恵（オーレ）」「今帰仁」「供のかね」の各ノロ殿内の火之神の祠が点在し、これらは現存するノロ殿内の故地と考えられている。

さて、山北・今帰仁城も監守制度の廃止後は手つかずのままになっていたようであるが、1749年には山北今帰仁城監守来歴碑の建立、乾隆7年（1743）の検地があり（『具志川家家譜』所収）、大正末年には鎌倉芳太郎氏の来村調査などの記録が残るのみで史料は散見的である。しかし、記録や遺物の検出が無いといっても恒常的な生活空間として利用されていないというだけで、聖域とし村内外からの参拝者が訪れていたと推測される。また、明治14年（1881）に上杉県令、明治26年（1893）に訪れた笹森儀助、大正末年に鎌倉芳太郎らが今帰仁城跡を訪れている。この残された記録等には、グスク周辺の景観またはその城下の様子について記載されており、明治～大正期の今帰仁グスク、グスク周辺の様子を伝えている。

行政的には今帰仁城跡が昭和47（1972）年には沖縄の日本復帰と同時に国指定の史跡に指定され、昭和55（1980）年より今帰仁村が主体となって環境整備事業がすすめられている。この中で、平成12（2000）年には世界遺産として指定されたことによって、周辺地域は景観保全地区に指定、さらに平成21（2009）年7月には城下北側に広がる11.5ヘクタールが新たに史跡地域として追加指定されることとなった。翌22（2010）年2月にはシイナグスクが追加され、『今帰仁城跡附シイナ城跡』として名称を改め史跡面積合計約22haになっている。



第2図 今帰仁城跡周辺遺跡分布図

第Ⅱ章 調査に至る経緯と概要

第１節 調査に至る経緯

今帰仁城跡周辺遺跡は、グスク周辺地域に所在する遺跡の範囲確認を目的として、既に昭和60年に試掘調査が行われている。これによって当該遺跡の概要については周知されるところである。しかし今帰仁村歴史文化センターの建設及び、平成4・5年度に駐車場やトイレなどが建設された際には、当地の発掘調査が行われることはなかった。この時の整備が今帰仁城跡の便益施設として整備されたこと、当時村には発掘調査を専従で担当する職員が配置されていなかったこと、発掘を行うことによって事業が遅延することを行政的に対応できなかったことが、主な理由である。このため遺跡地域は盛土され、埋土保存という施工によって駐車場を設置した。しかし、平成3年度に策定された『今帰仁城跡公園基本構想・基本計画』では当該地区に遺跡が広がっていることから、設置されたばかりのグスク広場について撤去計画を立案する形となっている。その後、平成7年度には今帰仁村歴史文化センターが開館し、今帰仁城跡のガイダンス施設として来訪客を集めている。

一方、平成12年12月今帰仁城跡を含む県内9遺産が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録された。このことから、平成7年度完成の既設駐車場では不十分であること、かつ史跡指定地内にある仮設駐車場の早期撤去が望まれていた。このように周辺整備の気運が高まる中、既設駐車場の大規模な配置変更を含んだ整備計画が策定される。当初計画は今帰仁ムラ跡東区の埋土保存という計画を基本としていたが、平成13年度に策定した『今帰仁城跡周辺整備計画』によって、西区の既存施設の大規模な改修計画が示された。

この計画を基に、村では計画地域の周知の埋蔵文化財包蔵地（今帰仁城跡周辺遺跡）における発掘調査については、建設工事着手前に埋蔵文化財を対象とした調査が必要と判断し、既設駐車場の撤去→発掘調査→今帰仁城跡周辺整備事業の工事着手の方針を確認した。しかし、遺跡の規模が大きく、発掘調査となれば数年以上かかることから、現在の村教育委員会の体制では作業が難航することが明らかであった。そこで、平成15年度に体制の強化を目的に発掘調査を担当する職員の増員等、調査体制の拡充をはかり、およそ2年間にわたる今帰仁城跡周辺遺跡の発掘調査を遅延なく完了することができた。

他方、村では上記の今帰仁城跡周辺整備着手以前より今帰仁城跡周辺遺跡についての重要性を認識し、鋭意継続して調査を実施している。特に平成16年度から平成18年度には今帰仁ムラ跡、ハント道の測量や今泊集落内における遺跡踏査を、平成19年度には親泊ムラ跡・志慶真ムラ跡、平成20年度に今帰仁ムラ跡の追加調査を文化庁および県の補助とご指導を得て諸種の調査を実施している。なお、発掘調査は遺構検出面までに留める方法を採用し保存を最優先としている。

このような調査を実践する中で得てきた知見は、今帰仁城跡を理解する上で欠くことのできない資料蓄積となり、平成21（2008）年5月15日に文化庁の答申を受け、7月23日に今帰仁城跡北側緩斜面一帯に広がる今帰仁ムラ跡・親泊ムラ跡・ハント道・石積遺構等を含む遺跡群が追加指定された。本報告書は、平成19～21（2007～2009）年度に行った調査をまとめたものである。

第2節 調査組織

調査体制は教育委員会が主体となって実施した。事業全体の総括責任者は教育長、課長、補佐までが担い、調査担当者は宮城弘樹、玉城靖の専門職員によって充てた。なお、当該職員だけでは事業の遂行は困難であることから、補助員として与那嶺 俊、黒沢 健明らによって現場・資料整理の調査補助を行うと共に、随時発掘調査アドバイザーとして金武正紀に遺跡の総括的な評価などについてご指導をお願いする体制を整えている。また、実際の現場、資料整理については複数名の臨時職員にご協力をいただいた。

〈平成19年度・発掘調査、資料整理〉

事業主体	今帰仁村教育委員会				
事業責任者	教育長	田港	朝茂		
	社会教育課長	松田	朝雄		
	社会教育課長補佐兼歴史文化センター館長	仲原	弘哲		
事務総括	文化財係長	田港	朝津		
	文化財係主事	金城	研		
調査担当者	文化財係専門員	宮城	弘樹	玉城	靖
発掘調査アドバイザー		金武	正紀		
調査補助員（臨時職員）		與那嶺	俊	具志堅	亮
発掘作業員（臨時職員）		仲村	善洋	宮里	政公
		金城	政利	玉城	京子
		松田	清美	仲原	美代子
		野村	富子	新垣	あゆみ
		玉城	光則	大城	いち子
		上間	恵子	玉城	亜紀
資料整理（臨時職員）		松本	綾子	山城	留利子
				玉城	静香
				中馬	直実

〈平成20年度・発掘調査、資料整理〉

事業主体	今帰仁村教育委員会				
事業責任者	教育長	田港	朝茂		
	総合教育課長	島袋	隆則		
	総合教育課長補佐兼歴史文化センター館長	仲原	弘哲		
事務総括	文化財係長	田港	朝津		
	文化財係主事	玉城	恵	金城	研
調査担当者	文化財係専門員	宮城	弘樹	玉城	靖
発掘調査アドバイザー		金武	正紀		
調査補助員（臨時職員）		與那嶺	俊		
発掘作業員（臨時職員）		仲村	善洋	宮里	政公
		宮城	章	金城	政利
		松尾	美智子	山内	豪
		仲原	美代子	大城	いち子
		上原	尚樹	内間	美佐子
				平安	兪美子
				玉城	京子
				松田	清美
				玉城	綾
				大城	ヒデ子
				仲宗根	直美
				城間	節子
				野村	富子

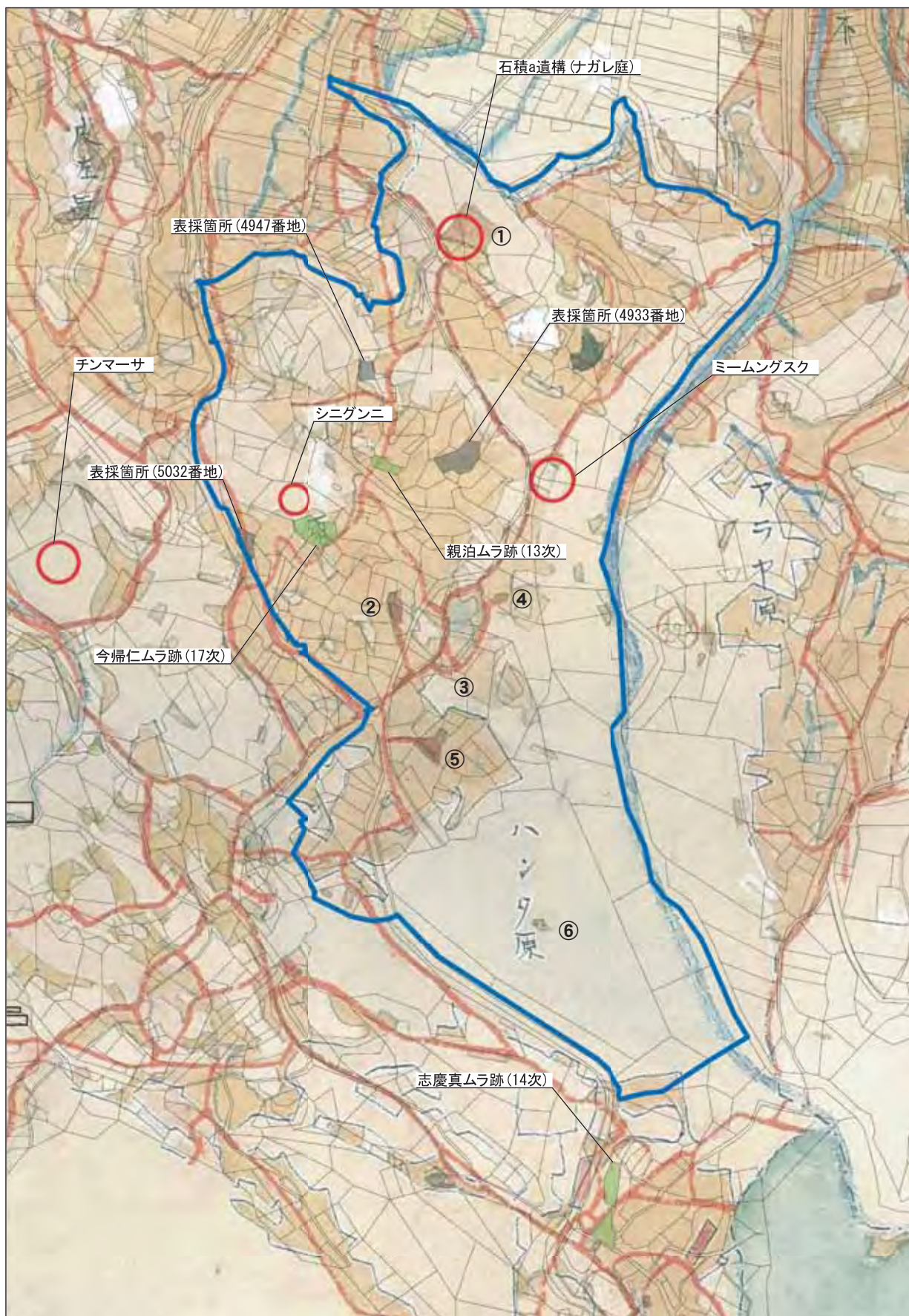
	諸喜田富士子	玉城 光則	当銘 由美	福原 りお
資料整理（臨時職員）	上間 恵子	玉城 静香	新垣あゆみ	玉城 亜紀
	松本 綾子	島袋 滝子	神山知枝子	山城留利子

〈平成21年度・資料整理〉

事業主体	今帰仁村教育委員会			
事業責任者	教育長	謝花 弘		
	総合教育課長	島袋 隆則		
	総合教育課主幹	上間 恒章		
	総合教育課長補佐兼歴史文化センター館長	仲原 弘哲		
事務総括	文化財係長	長田 光吉		
	文化財係主事	玉城 恵		
	臨時職員	日高 寛人		
調査担当者	文化財係専門員	宮城 弘樹	玉城 靖	
発掘調査アドバイザー	金武 正紀			
調査補助員（臨時職員）	與那嶺 俊	黒沢 健明		
発掘作業員（臨時職員）	仲村 善洋	平安 侖美子	宮里 政公	内間美佐子
	山内 豪	玉城 京子	仲宗根直美	城間 節子
	松尾美智子	宮城 章	松田 清美	仲原美代子
	金城 政利	玉城 光則		
資料整理（臨時職員）	上間 恵子	玉城 静香	新垣あゆみ	玉城 亜紀
	松本 綾子	島袋 滝子	神山知枝子	山城留利子
	有銘 倫子			

第3節 発掘調査の経過

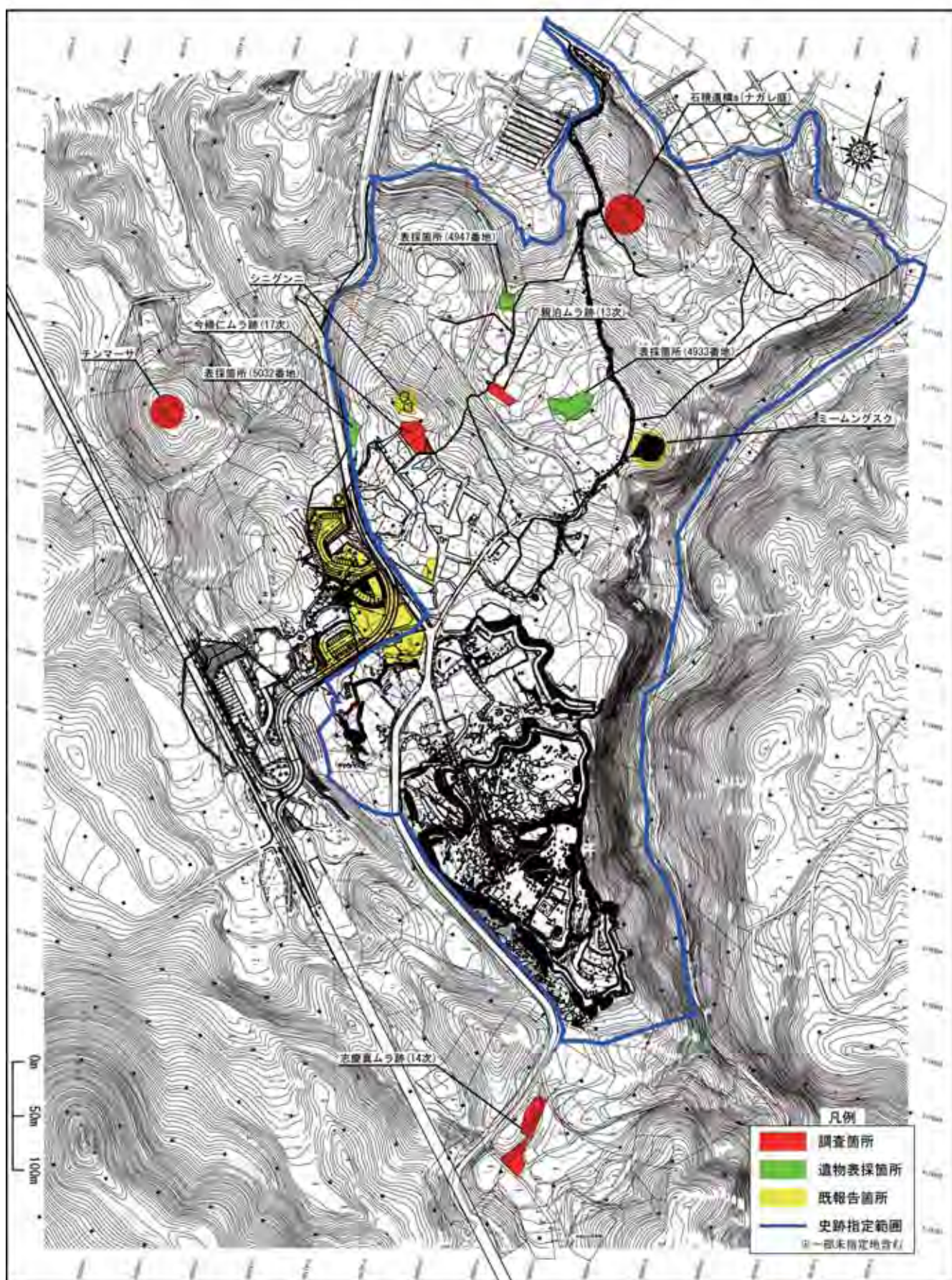
今帰仁城跡周辺遺跡の本格的な調査開始は1984年に行われた試掘調査で（今帰仁村教育委員会1986）、その後、整備計画に係る調査が実施され、遺物の散布や石積み遺構分布が今帰仁城跡の周辺地域各所に見られることが確認された（今帰仁村教育委員会1992）。また、今帰仁城跡が2000年12月に世界遺産登録されたことを契機に今帰仁城跡への来訪者のために駐車場の整備が計画された。2002年には今帰仁城跡周辺整備事業計画が策定され、今帰仁村では過去に実施していた試掘調査の成果などを踏まえ、恒久的構造物としての駐車場が設置される地域およそ4,000㎡において2003年に調査を行っている。今帰仁城跡周辺遺跡の調査は2004年以降も継続して行い、今帰仁ムラ跡東区発掘調査、ハンタ道測量調査、石積遺構調査、大川原遺跡法面調査などを行っている。前述の調査については既に本報告が刊行されているので参考にされたい（今帰仁村教育委員会2005、2007）。



第3図 今帰仁城跡の現況地積図と明治の地積図の重ね図

		史跡整備事業等に伴う発掘調査				今帰仁城跡周辺遺跡の発掘調査				
年度	西暦	事業名	調査地区	調査面積	期間	調査	調査地区	調査原因	調査面積	期間
平成元年	1989	主に整備・資料整理								
平成2年	1990	主に整備・資料整理	主郭東側城壁（2次）写真測量に伴う崩落石除去（直営）	約40㎡						
平成3年	1991	主に整備・資料整理								
平成4年	1992	主に整備・資料整理								
平成5年	1993	主に整備・資料整理								
平成6年	1994	志慶真門郭東側石積み基礎調査	志慶真門郭東側石積外壁側基礎	約6㎡	9/12～9/13					
平成7年	1995	志慶真門郭東側石積土質調査	志慶真門郭東側石積外壁側基礎	約20㎡	9/13～1/13					
平成8年	1996	志慶真門郭東側石積試掘調査	志慶真門郭北東部北側アザナ調査	約20㎡	9/2～9/14					
		志慶真門郭東側石積試掘調査	志慶真門郭北東部南側アザナ調査	約20㎡	10/7～10/19					
平成9年	1997	志慶真門郭南側石積試掘調査	志慶真門郭南側石積外壁側基礎	約2㎡	6/25～9/12					
		志慶真門郭南側石積試掘調査	志慶真門郭南側石積外壁側基礎	約5㎡	2/16～3/24					
平成10年	1998	外郭石積遺構調査	外郭西地区石積み遺構調査	約10㎡	5/11～7/29					
平成11年	1999	志慶真門外壁遺構調査	志慶真門	約10㎡	4/13～2/29					
		階段遺構確認補足調査	主郭西側階段遺構	約3㎡	9/30～10/1					
		主郭東側石積遺構確認調査	主郭東側調査（3次）	約10㎡	3/17～3/26					
平成12年	2000	主郭東側工事に伴う立会調査	主郭東側調査（4次）		11/13～2/22					
		大隅城壁修理工事に伴う事前確認調査	大隅城壁調査	約10㎡	9/26～3/31					
平成13年	2001	主郭東側崩落石撤去工事に伴う立会調査	主郭東側調査（5次）		9/21～12/19					
平成14年	2002	主郭東側城壁内壁試掘調査	主郭東側調査（6次）	約40㎡	9/2～9/20					
		主郭東側工事に伴う立会調査	主郭東側調査（7次）		2/6～3/27					
平成15年	2003	主郭南側城壁崩落石撤去	南側城壁調査（1次）	8㎡	9/1～10/31	2次	西区Ⅰ区・Ⅱ区b	公園整備（記録保存）	1300㎡	4/24～11/7
						3次	ハラクブ		41箇所（5,000㎡）	5/14～7/25
						4次	東区（1・7区）	遺跡範囲確認	2地点（30㎡）	9/24～10/28
		鳥居撤去工事に伴う立会調査	Z-30			5次	西区Ⅴ区・Ⅳ区の一部	公園整備（記録保存）	400㎡	10/27～1/7
						6次	西区Ⅲc・Ⅳ区（旧称Ⅲd）		800㎡	12/8～2/25
						7次	西区Ⅳ区		400㎡	1/14～1/26
平成16年	2004	第1次外郭発掘調査	城外北西区R-23～26、S-23～26	400㎡	4/21～3/31	8次	西区Ⅲa	公園整備（記録保存）	400㎡	5/13～11/10
		工事に伴う立会調査	主郭東南アザナ調査	11/12～3/21	9次	西区Ⅲb	600㎡		5/13～12/4	
					10次	西区Ⅱa	200㎡		12/21～1/21	
					11次	道路敷下	200㎡		1/20～3/31	
		墓撤去立会調査	U-24	9㎡	2005年4月	12次	東区（7区）	遺跡範囲確認	200㎡	12/2～3/31
平成17年	2005	第2次外郭発掘調査	試掘、東区Ⅸ区R-28～29、Ⅲ区Ⅴ-33ほか	800㎡	8/9～3/31	資料整理				4月～3月
		主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査（2次）南西アザナ基礎調査	10㎡	6/22～8/22					
		主郭東側工事に伴う立会調査（工事）	主郭東側調査（8次）		1/26～3/31					
平成18年	2006	第3次外郭発掘調査	東区Ⅲ・Ⅳ区U-33～36、T-33～36ほか	1000㎡	4/24～3/30	補足	大川原遺跡	法面崩落（記録保存）	20㎡	4月～3月
		第4次外郭発掘調査	外郭東区城壁基礎調査	200㎡	4/24～3/30	資料整理 確認 今泊集落内				4月～3月
		主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査（3次）上段部基礎調査	20㎡	5月～7月					
平成19年	2007	第5次外郭発掘調査	東区Ⅶ区S-33、R-33・34、Ⅷ区Q-30～33ほか	1000㎡	4/23～3/30	13次	親泊ムラ跡（4983番地）	遺跡範囲確認	43㎡	9/19～10/10
		主郭南側城壁崩落石撤去	主郭南側城壁調査（4次）下段部基礎調査	20㎡	5月～6月	14次	志慶真ムラ跡（4853番地ほか）	遺跡範囲確認	32㎡	12/1～12/28
平成20年	2008	第6次外郭発掘調査	東区Ⅷ区Q-30、R-30～32、S-31	400㎡	7/1～11/28	16次	ハラクブ試掘調査（4929-1番地）	遺跡有無確認	2㎡×5箇所	7月1日
		第7次外郭発掘調査	外郭東区城壁基礎調査	200㎡		15次	ナガレ庭遺構調査（4699番地ほか）	測量調査	40㎡	8/1～8/14
		第8次外郭発掘調査	外郭Ⅴ区R-36、S-36ほか	400㎡		17次	今帰仁ムラ跡（5012番地）	遺跡有無確認	362㎡	11/4～12/9
		第9次外郭発掘調査	外郭Ⅷ区Q-32・33ほか	200㎡						
平成21年	2009	第10次外郭発掘調査	東区Ⅷ区Q-30～33、R-30～32ほか	約600㎡	4/15～10/1	18次	チンマーサ遺構調査	測量調査	約700㎡	8/3～8/14
		第11次外郭発掘調査	外郭西区城壁基礎調査	約1000㎡	4/15～10/30	19次	今帰仁城跡周辺の旧道調査	遺跡有無確認		2/1～2/26
		第12次外郭発掘調査	外郭中区県道115号道路下調査	約250㎡	12/3～3/31					

第1表 今帰仁城跡及び周辺遺跡のこれまでの調査



第4図 今帰仁城跡周辺遺跡調査箇所位置図

第Ⅲ章 報 告

第 1 節 今帰仁ムラ跡（13区）

調査概要

17次調査として平成20年12月1日から12月12日までの期間で行われた。範囲確認調査地区は今帰仁ムラ跡13区とした区画石積み遺構の残る最北端地の今泊5012番地ほかの平場を選定した（調査面積約362㎡）。遺跡全体の詳細概要については既刊報告を参照されたい（今帰仁村教育委員会2007）。

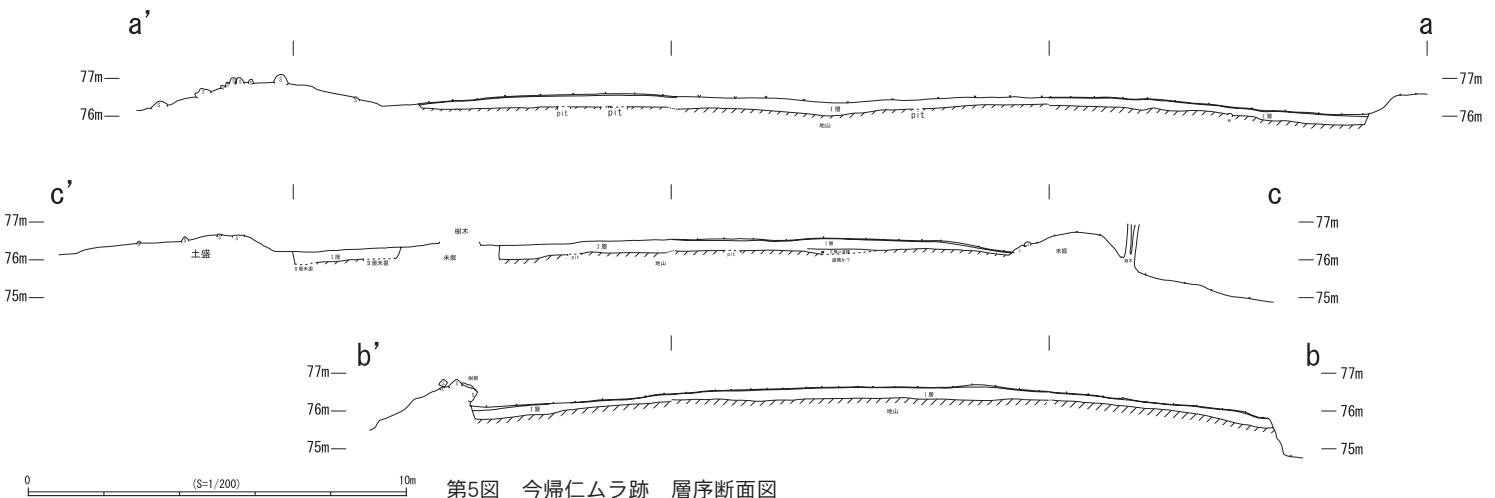
試掘調査はトレンチをL字形に設け、平場全体の堆積状況の把握、及び地山面での遺構検出に努めた。土層堆積は全体が20～30cm程度の褐色の単一層ですぐに地山面に至った。地山面からは柱穴遺構36基、土坑1基、溝状遺構2基が確認された。

1) 基本層序

調査区全体約20～30cm程度の表土層が堆積していた。グスク時代に限られた遺物包含層は確認されず、遺物を含まない自然堆積層の地山面との2つのみに大別できた。I層からはグスク時代に限られるであろう遺物が出土するが、グスク時代に限定される包含層が検出されないのは今帰仁ムラ跡東区7区においても同様で、この一帯における特徴と思われる（今帰仁村教育委員会2007）。

I層：【褐色土層】腐食・耕作土層。調査地の全域が覆われる。ガラス瓶や近現代の陶磁器等を包含するが、グスク時代相当の遺物も出土する。

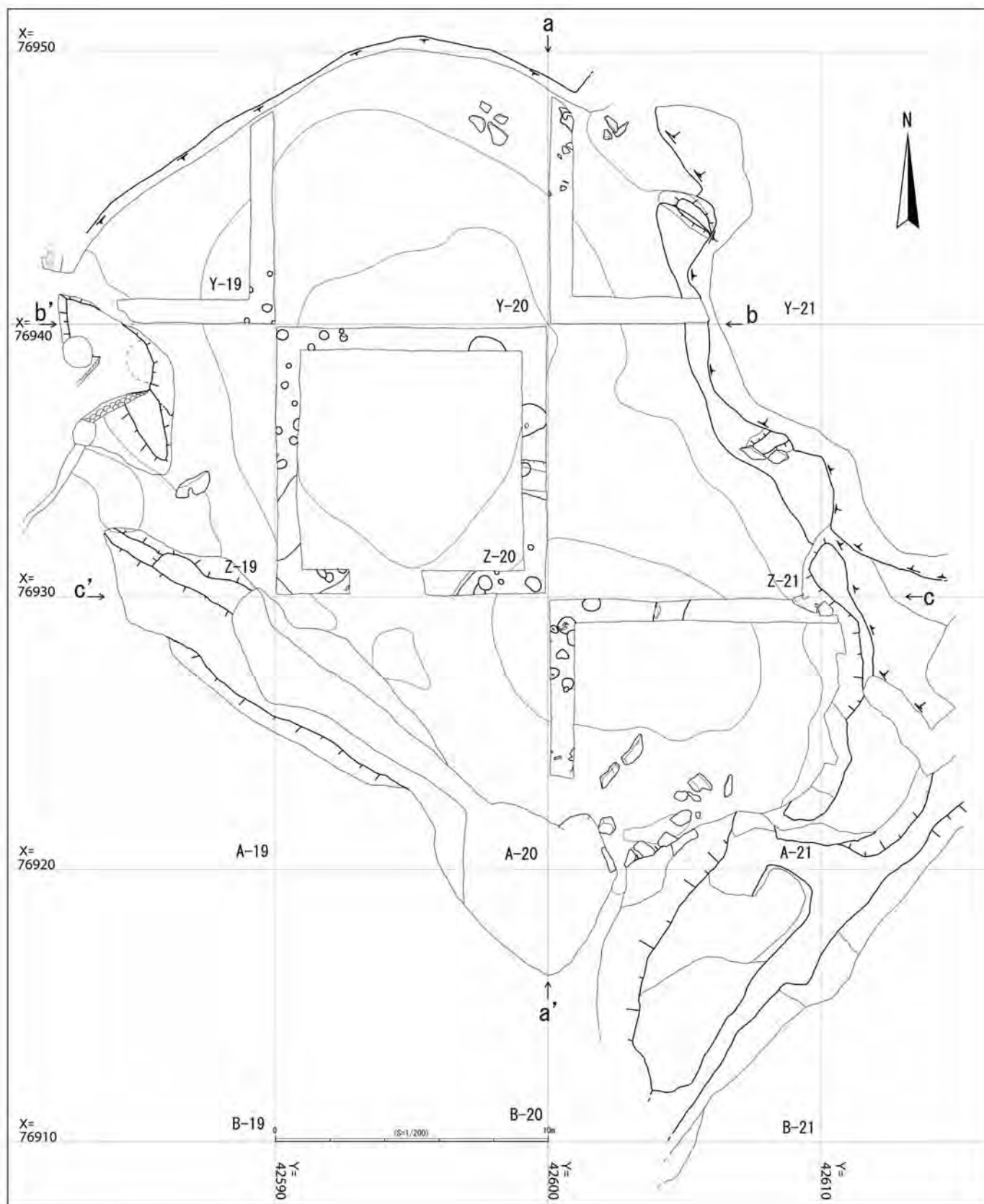
地山層：【明褐色土層・黄褐色土層】古期石灰岩の岩盤が一部で露頭する。



第5図 今帰仁ムラ跡 層序断面図

2) 遺構

今回調査を行った地区は、今帰仁ムラ跡の区画石積みが残る最北端に位置する。隣接する平場には第2石積遺構のシニグンニがある。これまで行ってきた調査地区は今帰仁城跡に隣接する主要地区であった。当該調査地区においてはムラのはずれに位置するため遺構の密度は比較的少なかったが、土盛りや区画石積みで囲まれた空間に平場が構成される特徴はこれまでの今帰仁ムラ跡調査と同様で、A-21、Z-20北西側において柱穴の密集が確認できた。それぞれ掘立柱建物と思われるが、調査面積が狭小であったこともあり、建物跡の推定を行うことはできていない。

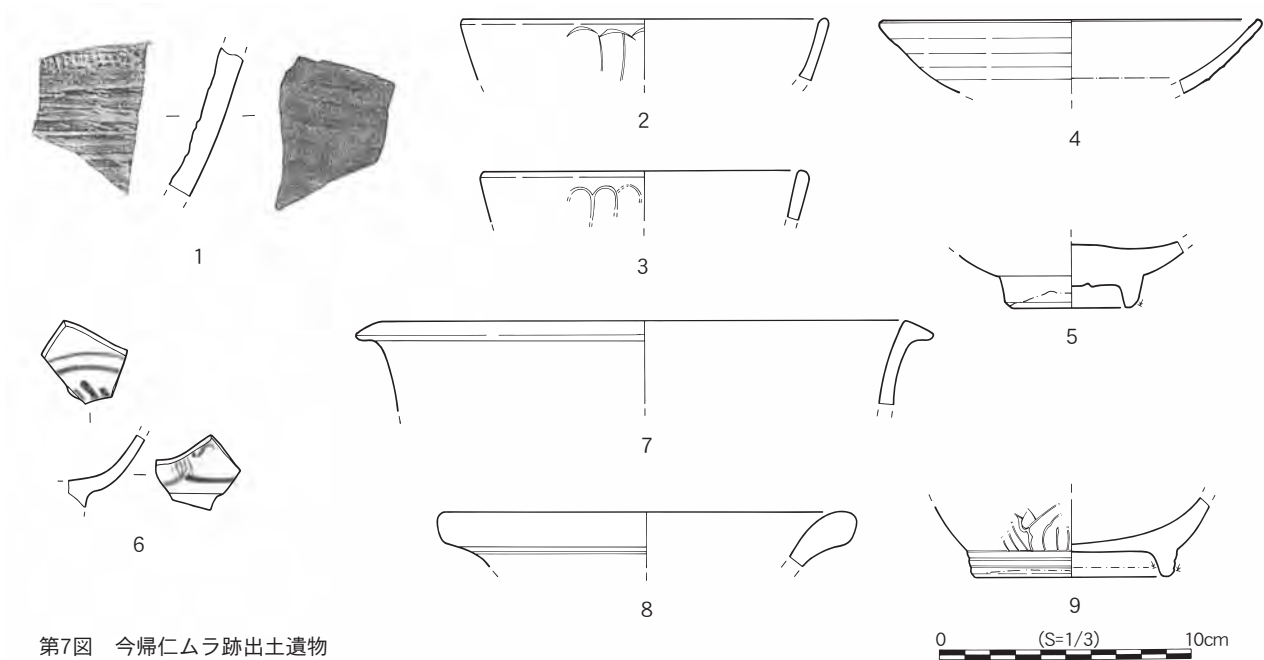


第6図 今帰仁ムラ跡（13区）調査区 配置図

3) 遺物

遺物は主に近現代の陶磁器とグスク時代の中国産陶磁器が出土、他に獣骨、貝類が見つかったりる。

- 1. カムイヤキ (第7図-1) 1は器壁の厚い典型的なB群と思われる胴部資料。
- 2. 青磁 (第7図-2~5) 2・3はいわゆる細蓮弁文碗 (龍泉窯系VI類) の口縁部資料。5は同VI類底部で、胎土は赤茶けて粗雑な印象を受ける。4は福建・広東系の白磁とも青磁ともとれる粗製の口縁部資料で青磁に分類しておく。口縁部は丸くならず内面は若干角を持ち、灰緑色の釉は見込みまで施釉されない。
- 3. 青花 (第7図-6) 小破片の為に要検討であるが、腰部の折れ曲がりや外面のアラベスク文からD群と思われる。見込みの文様は十字文の一部か。
- 4. 沖縄産陶器 (第7図-7・8) 7は施釉陶器の鉢で口縁部は外に折れ曲がる。内外面に貫入がみられ、外面は黒釉、内面は白化粧後に透明釉を施す。8は玉縁状に肥厚する大型の無釉陶器壺。
- 5. ベトナム白磁 (第7図-9) 9は白磁の瓶である。産地は不明であるが、釉調からベトナムの可能性はある。畳付には砂が付着し外器面には線彫りによる文様を施す。



第7図 今帰仁ムラ跡出土遺物

種別	器種	分類	器形・文様等		I 層	種別	器種	分類	器形・文様等		I 層
青磁	碗	龍泉窯系Ⅳ～Ⅴ類	無文外反	口縁	1	白磁	碗	福建邵武窯	D2 (内彎型)	口縁	2
		龍泉窯系Ⅴ類	無文直口	口縁	2		皿	景德鎮窯系	E 群 (外反皿)	底部	1
			不明	底部	3		杯	景德鎮窯系	E 群	口縁	2
			龍泉窯系Ⅵ類	細蓮弁文	口縁		14	瓶	有文胴部		口縁
			不明	底部	3	碗		D 群	腰折れ	口縁	9
		龍泉窯系Ⅶ類	細蓮弁文	口縁	1			C' 群	外反	口縁	1
		分類不明	碗	口縁	6			不明		口縁	9
	皿	龍泉窯系Ⅲ類	口折皿	口縁	1	青花	皿	B 1 群	外反	口縁	1
		龍泉窯系Ⅳ～Ⅴ類	腰折稜花	口縁	2					底部	1
			腰折無文	口縁	6			口縁	1		
			直口有文	口縁	1			底部	1		
		龍泉窯系Ⅵ類	直口無文	底部	1		杯	主郭分類Ⅰ類	筒型	胴部	1
		瓶			底部	1	緑釉陶器	袋物	胴部	1	
	酒会壺		蓋	蓋	1	ベトナム白磁	瓶		底部	1	
	カムイヤキ	壺	B 群		胴部	3	近現代陶磁（沖縄産）				
円盤状製品		Ⅱa（主郭分類）	青磁胴部		1	近現代陶磁（本土産）					・

※破片数

第2表 今帰仁ムラ跡出土遺物集計表 (17次)

第2節 親泊ムラ跡

調査概要

今帰仁城跡の北側緩斜面には今帰仁ムラと親泊ムラが立地し、親泊ムラにおいてはこれまで未発掘、さらに比定地も不明であった。これまで親泊ムラ跡所在の根拠としてハタイ原ウーニーの存在が指摘されている。ウーニーは他に今帰仁城跡外郭のレイコーラウーニーも所在しており、それぞれの集落でウーニーを所有していたと考えられることから、レイコーラウーニーの一角を今帰仁ムラ、ハタイ原ウーニーの一角を親泊ムラの故地とされている（今帰仁村教育委員会2007）。その後、1609年の薩摩侵攻、1665年監守引き揚げにより今帰仁グスクが使用されなくなることを契機として、親泊ムラは今帰仁ムラと共に現今泊集落へ集落移動を行ったとされている。

今回、13次調査において親泊ムラの範囲内と想定している今泊4983番地（252㎡）の試掘調査を行った（平成19年9月19日～29日）。調査はトレンチをL字に設け、平場全体の堆積状況の把握、及び地山面での遺構検出に努めた。土層堆積は全体が30～60cmで場所によってはすぐに地山面に至る箇所もあった。遺構は地山面から検出され、柱穴遺構86基、土坑1基、土留め石積み遺構1基が確認された。

1) 層序

残りのよい箇所では30～60cm堆積しておりⅠ～Ⅳ層に分層している。

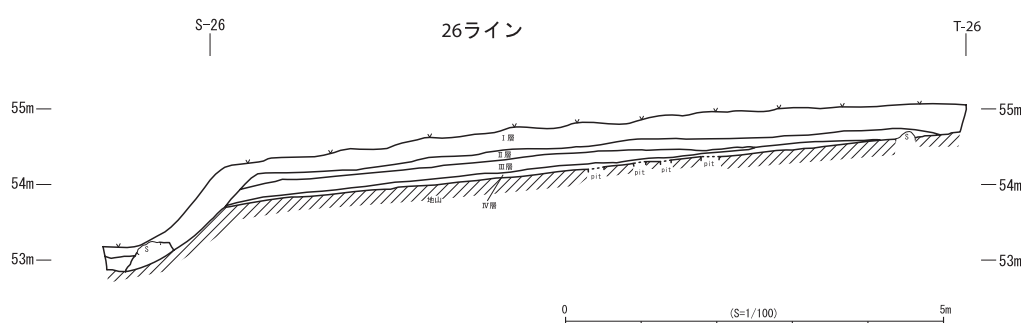
Ⅰ層：【褐色土層】腐食・耕作土層。調査地の全域が覆われる。ガラス瓶や近現代の陶磁器等を包含するが、グスク時代相当の遺物も出土する。20～50cmの堆積。

Ⅱ層：【暗褐色土層】当該調査区の形成期のグスク時代相当の包含層。

Ⅲ層：【褐色土層】当該調査区の形成期のグスク時代相当の包含層。

Ⅳ層：【褐色土層・黄褐色土層】地山移行層。

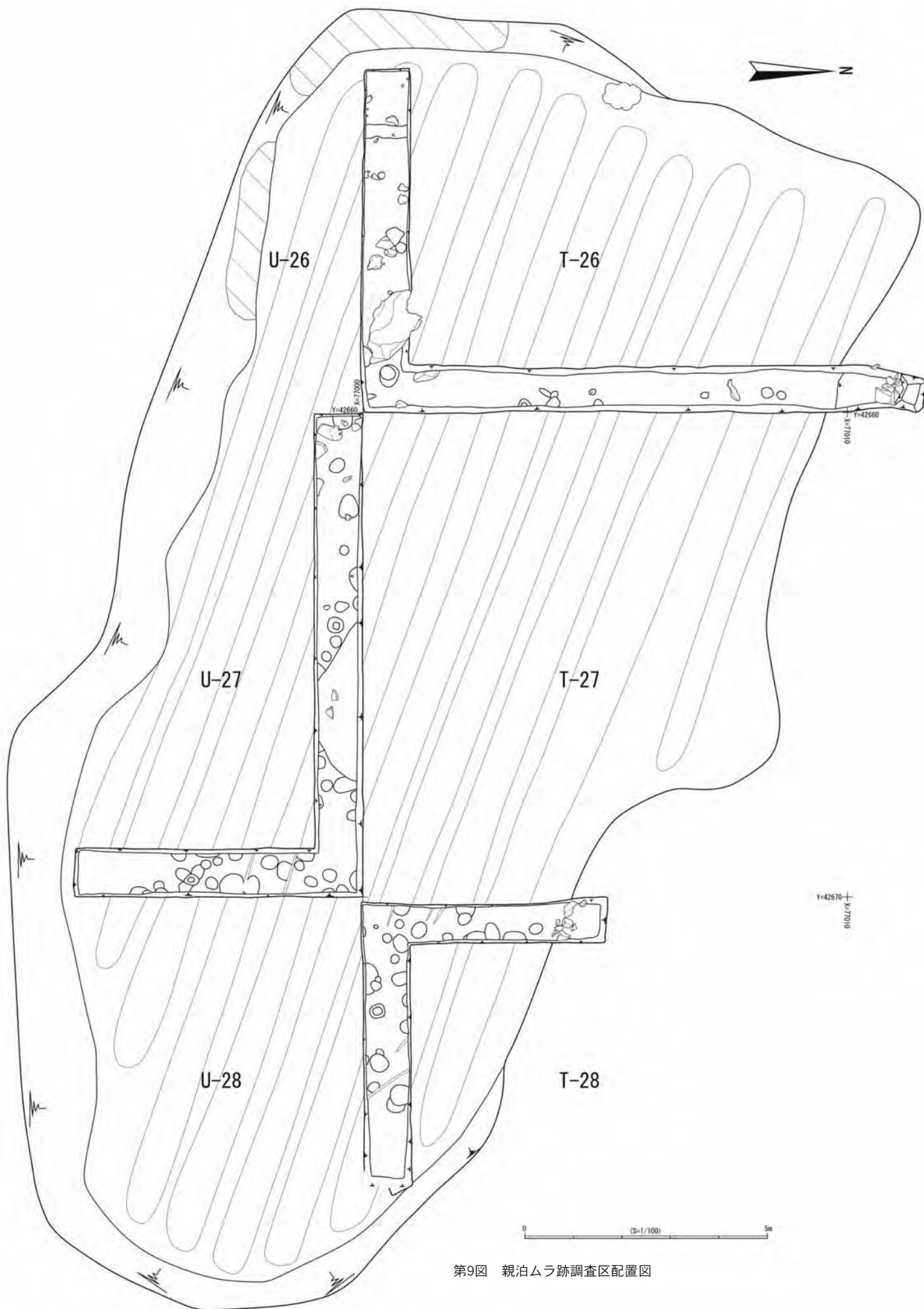
地山層：【明褐色土層・黄褐色土層】古期石灰岩の岩盤が一部で露頭する。



第8図 親泊ムラ跡 T-26 東壁図

2) 遺構

当該調査はグリッド設定後L字にトレンチを設けた。表土層及びグスク時代相当の遺物包含層を掘り下げると、遺構が地山面から検出され、柱穴遺構86基、土坑1基、土留め石積み遺構1基が確認されている。狭小なトレンチにも関わらず調査区東側において多くの柱穴遺構が見つかる。遺構プランは確認できなかったがトレンチ東側で柱穴が多く確認され、母屋的な建物遺構があったものと思われる。さらに平場と平場の境界では包含層がやや厚く堆積し土留め石積みも確認されている。なお、遺構は平面検出のみで掘削は行わなかった。



第9図 親泊ムラ跡調査区配置図

3) 遺物

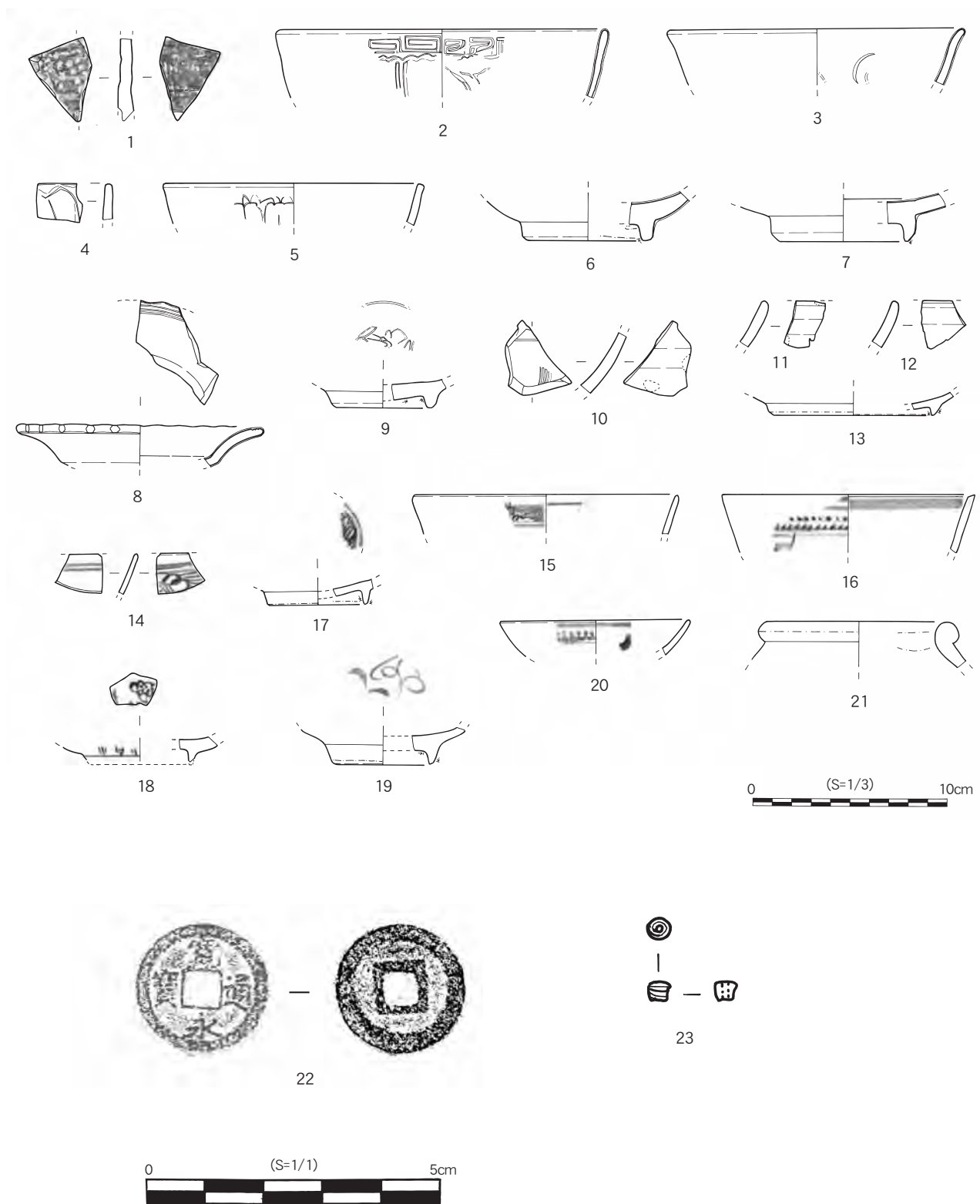
遺物は主に中国産陶磁器が出土し、他に獣骨、貝類が見つかった。近現代の遺物はⅠ層や表採で若干得られているのみである。

1. カムイヤキ (第10図-1) 1は器壁は薄いことからA群と思われる胴部資料。外面に平行線の叩き痕、内面に格子目状の当て具痕が残る。
2. 青磁 (第10図-2～9) 2は雷文碗(龍泉窯系Ⅴ類)の口縁部資料で、内外面にスタンプによる文様を施す。3は同Ⅴ類の外反口縁資料で内面に草花文を施文する。4・5は同Ⅵ類の口縁部資料。6は同Ⅴ類、7は同Ⅵ類底部資料。8は同Ⅵ類の稜花皿口縁部資料で、外側に大きく外反する。9はⅤ類底部資料で外底は蛇の目釉剥ぎ。
3. 白磁 (第10図-10～13) 10はC1群の胴部資料で内面に口縁直下の陰圏線、櫛描きによる文様を施す(ビロースクⅠ・閩清窯系)。11・12はC2群の口縁部資料(ビロースクⅡ・閩清窯系)。13はE群の皿底部。
4. 青花 (第10図-14～20) 14・17はC群で外面に波濤文と界線、内面口縁直下に界線を施す。17の見込みは凹み、蓮花文を施す。15・16は口縁部の立ち上がりや文様等からD群と思われる。口縁直下内面に界線、15は外面に波濤文、16では波濤文が崩れたと思われる連点文が施される。18・19はD群の底部。見込みは平坦で連点文が施される。20はC群の碁笥底皿と思われる口縁部資料。
5. 褐釉陶器 (第10図-21) 21は褐釉陶器壺で、口縁は外に折れて肥厚する。
6. 銭貨 (第10図-22) 22は寛永通寶(新寛永・1697)。
7. 玉 (第10図-23) 23はガラス小玉である。主郭分類において丸玉としたものに該当し、C種(5mm以下の小玉で溶解したガラスを1～3回程度棒状工具で巻き上げる資料)。

種別	器種	分類	器形・文様等	部位	I層	種別	器種	分類	器形・文様等	部位	I層			
青磁	碗	龍泉窯系Ⅰ類	劃花文	底部	1	青花	碗	BⅠ群	外反	口縁	2			
		龍泉窯系Ⅳ類	無銘蓮弁	口縁	2					底部	1			
		龍泉窯系Ⅳ～Ⅴ類	無文外反	口縁	28			C群	蓮子	口縁	1			
			外反(内面有文)	口縁	4					底部	2			
		龍泉窯系Ⅴ類	雷文帯	口縁	9			D群	腰折れ	口縁	7			
			無文外反	口縁	2					底部	1			
			無文直口	口縁	6		BⅠ群	外反	口縁	3				
			不明	底部	4				底部	1				
		龍泉窯系Ⅵ類	細蓮弁文	口縁	27		C群	碁笥底	口縁	2				
			不明	底部	2				E群	内湾	口縁	1		
	皿	同安窯系Ⅰ類	櫛描文	口縁	1		不明		口縁	5				
				底部	1		褐釉陶器(壺)		大型	玉縁口縁	口縁	1		
		龍泉窯系Ⅳ～Ⅴ類	腰折稜花(有文)	口縁	2		タイ	土器	不明		底部	2		
			腰折無文	口縁	9				半練	蓋	胴部	1		
		龍泉窯系Ⅴ類	不明	底部	5		褐釉陶器	ノイ川窯系	大型壺	口縁	1			
		龍泉窯系Ⅵ類		口縁	7	カムイヤキ	不明	A・B	不明	胴部	4			
白磁	碗	福建閩清窯		底部	1	グスク土器	不明	不明		胴部	6			
				口縁	2			銅製品		不明	2			
				口縁	1			鉄製品	釘	中	1			
	皿	景德鎮窯系	C1(ヒ・ロースク1)	口縁	1	金属製品				小	1			
			C2(ヒ・ロースク2)	口縁	3					板状製品		2		
			C3(無文外反)	口縁	3					棒状製品		4		
			E群(外反皿)	口縁	5									
				底部	5									
		福建邵武窯	D1群(小皿)	口縁	1									

※破片数

第3表 親泊ムラ跡出土遺物集計表



第10図 親泊ムラ跡 出土遺物

第3節 志慶真ムラ跡

概要

今帰仁城跡の南側緩斜面の迫地に立地する集落跡で、現在の諸志集落の故地の一つとされている。詳細については既報告を参照されたいが（今帰仁村教育委員会2007：p137）、平成19年11月26日～12月20日の期間に試掘調査を行い、調査地である今泊4853番地は数十年前まで屋敷があり、重機等によりいくらか破壊を受けていたが、畝も残っており主に畑地として使用されていたようである。試掘箇所7箇所の3箇所において遺物包含層を確認している（第12図）。

1) 層序

調査区にT.P.1～7を設けた。1～3・7においては攪乱を受けており残りが悪かった。比較的残りのよかったT.P.6を基本層序とする。約70cm堆積しておりI～IV層に分層している。

I層：【褐色土層・黄褐色土層】腐食・耕作土層。調査地の全域が覆われる。ガラス瓶や近現代の陶磁器等を包含するが、グスク時代相当の遺物も出土する。約30cmの堆積。

II層：【褐色土層・黄褐色土層】旧表土層。黄色土がブロック状に混ざる。

III層：【暗褐色土層】グスク時代相当の包含層。炭・焼土・黄色土を少量含む。

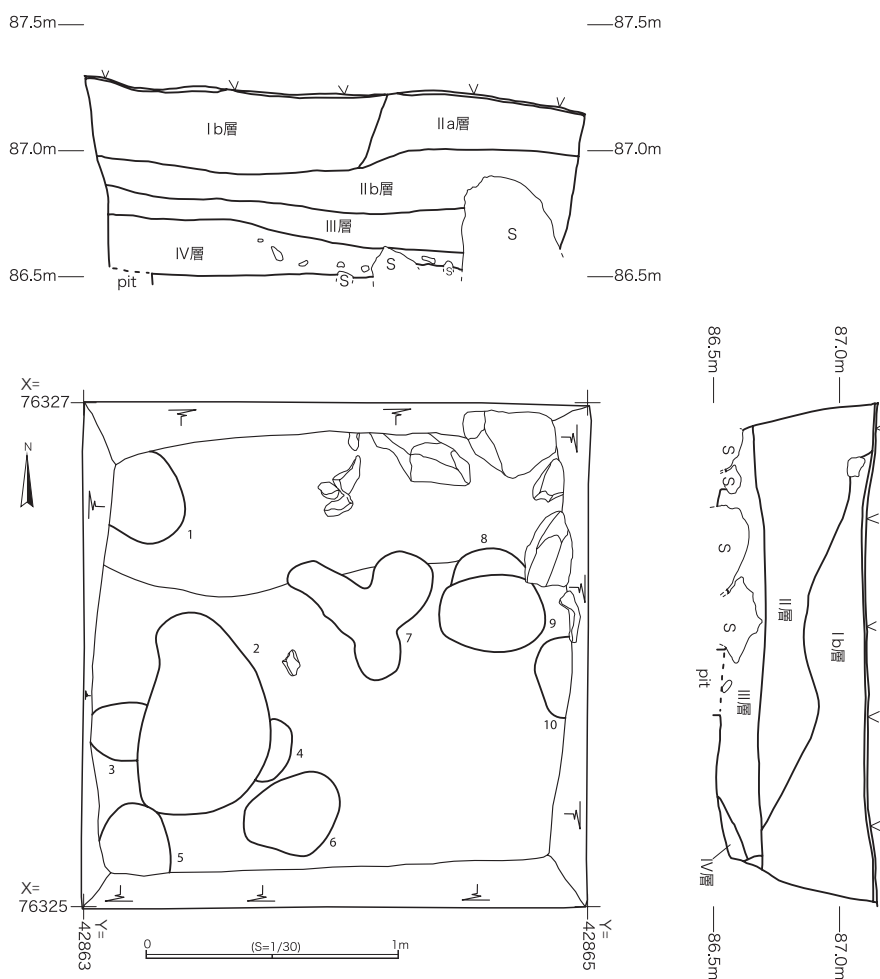
IV層：【褐色土層・黄褐色土層・にぶい黄色土層】グスク時代相当の包含層。

地山層：【明褐色土層・黄褐色土層】古期石灰岩の岩盤が一部で露頭する。

2) 遺構

近年まで畑として利用していたT.P.4～6周辺では畝も残り重機等による破壊を受けていなかったため、グスク時代相当の包含層が残っていた。そのうち5・6において地山層上面より柱穴遺構を確認している。以下、T.P.毎に詳細を述べる。

T.P.1・2は堆積状況を確認するために調査途中で結合させた。T.P.1・2は攪乱による破壊を受けていた。グスク時代相当の包含層は確認されなかったが、地山面より近現代相当と思われる土坑（SK20）を検出した（第13図）。黄褐色の覆土には遺物を殆ど含まず、楕円形が2つ繋がったような形状で、流れ込みによる堆積と判断できると考えられるが詳細はよくわかっていない。



第11図 T.P.6 遺構詳細図

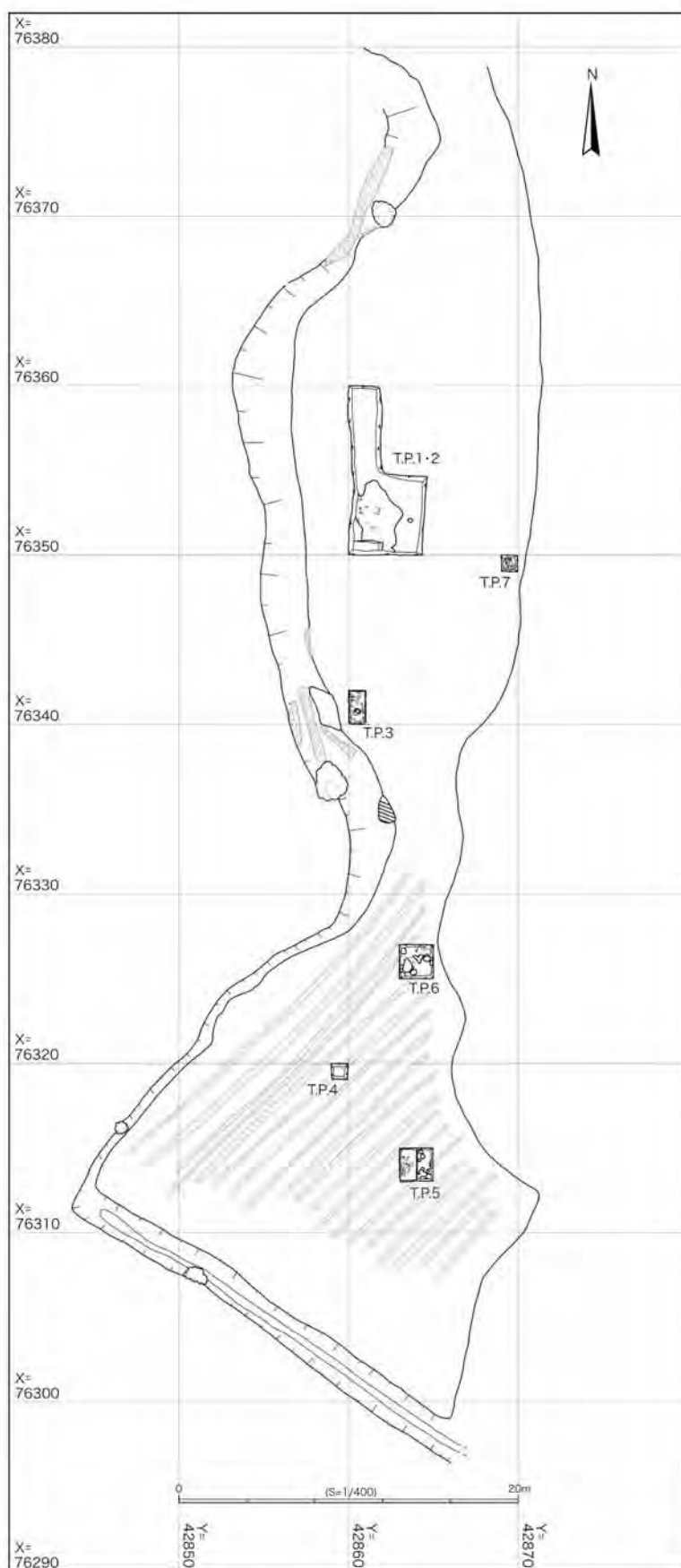
T.P.3もT.P.1・2と同様に攪乱を受けていて、20～30cmの攪乱層を除去するとすぐに地山面に至り、遺構等は確認されなかった。

T.P.4は今泊4855番地の中央部に1×1mで設けた。周囲は畝が綺麗に残っていて十数年前まで畑として利用していたようである。耕作土層（Ⅰb層）を除去すると旧表土（Ⅱ層）及びグスク時代相当の包含層（Ⅲ・Ⅳ層）が確認されたが、遺構は確認されなかった。

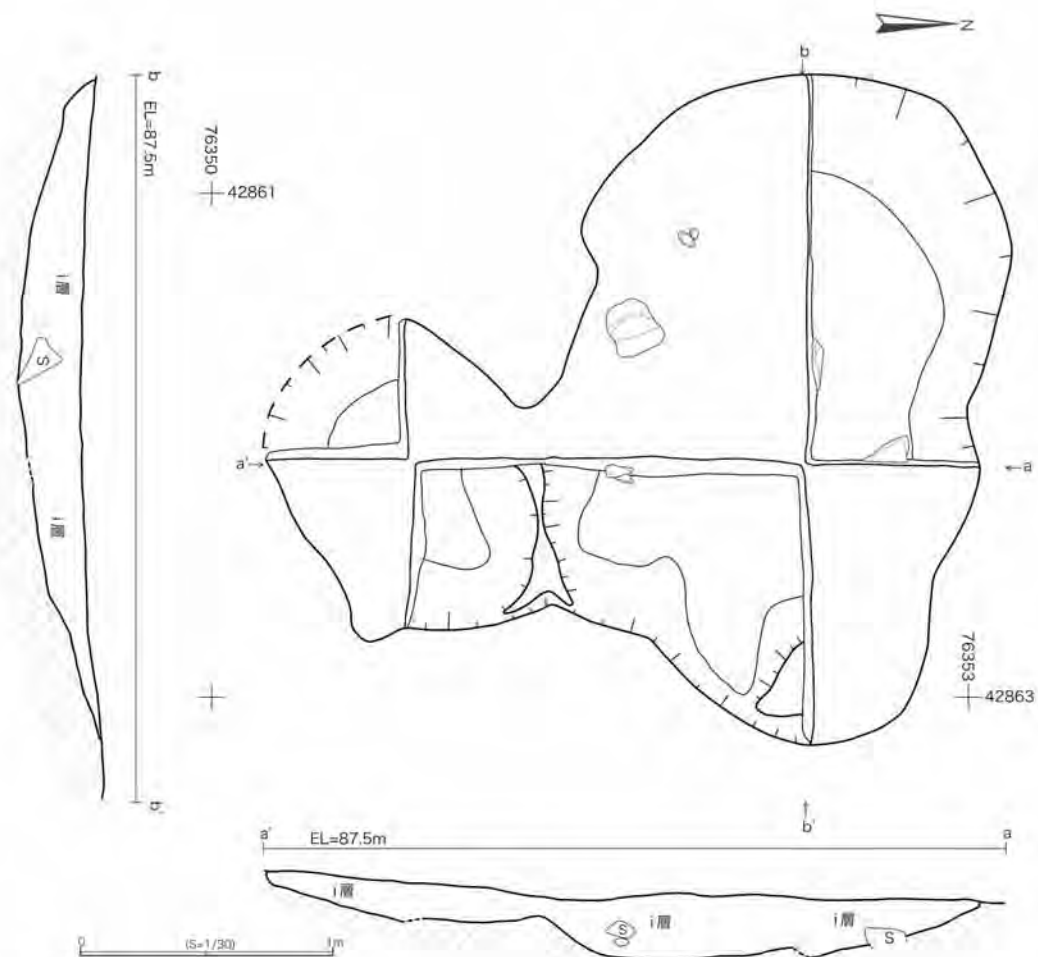
T.P.5はT.P.4の数m南側で設けた。堆積状況はほぼT.P.4と同じであったがⅣ層上面で柱穴遺構を確認した。遺構の掘削は行っていないため遺構の詳細はわかっていないが、約2㎡のトレンチで約11基の遺構密度であった（第14図）。

T.P.6はT.P.5の約10m真北に2×2mで設けた（第11図）。層序については既に記したが、耕作土層のⅠ層、旧表土層のⅡ層、グスク時代相当のⅢ・Ⅳ層、地山に分けられる。遺構はT.P.5と同様に多くの柱穴が確認された。切り合い等を勘案しても10基近くあり、T.P.4～6（4855番地）の一带を掘り広げると母屋建物が検出されると思われる。

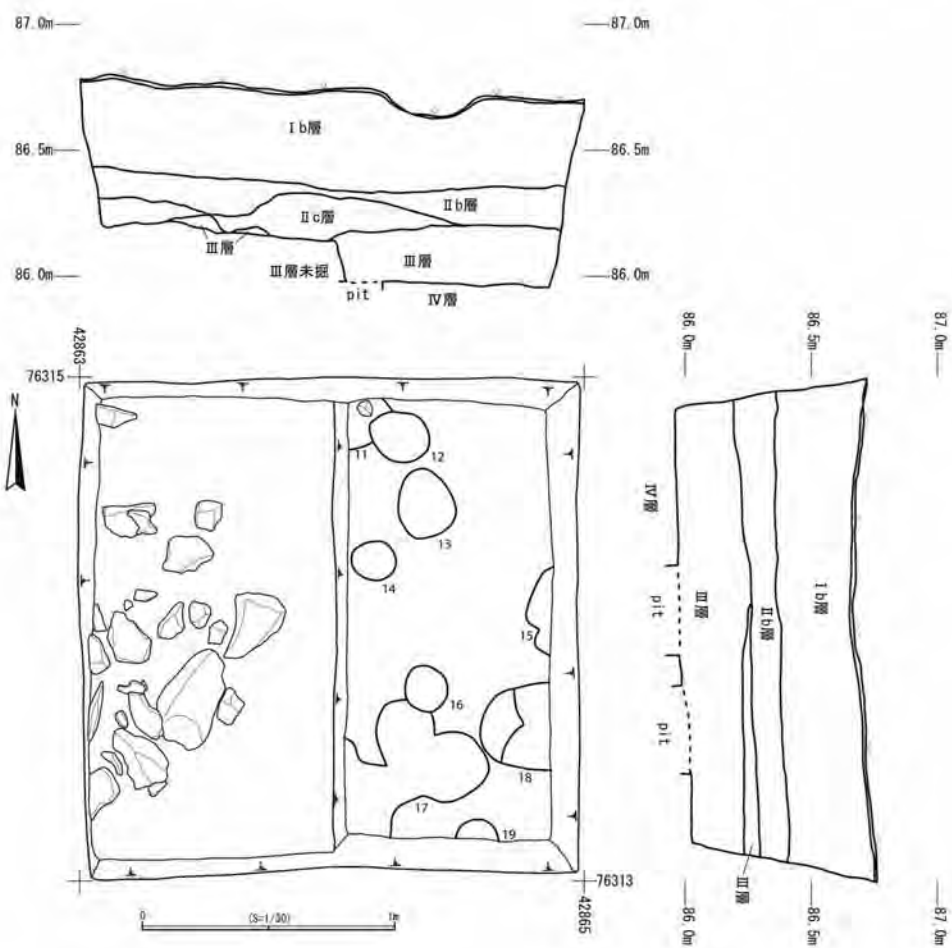
T.P.7は攪乱を受けていた。攪乱層は約1.5mの深さまであり、下層からは近現代相当の旧表土が確認されている。この層は屋敷を造った際の造成層と思われる。遺物は確認されていない。



第12図 志慶真ムラ跡調査区配置図



第13図 T.P.1・2 遺構詳細図



第14図 T.P.5 遺構詳細図

3) 遺物

表採資料

1. 青磁 (第15図-1~7) 1は雷文碗 (龍泉窯系V類) の口縁部資料で、内外面にスタンプによる文様を施すが文様ははっきりとは確認できない。2は同V類無鎬蓮弁文碗底部。3は同VI類底部。4は同VII類口縁部で雷文帯が退化したと思われる波状文が施される。6は同VI類稜花皿。5・7は釉調等から同VII類稜花皿の同一個体と思われる。

2. 白磁 (第15図-8) 上部を欠損する資料で白磁と思われる。畳付けはヘラで雑に面取りがなされる。

3. 近代染付 (第15図-9) 畳付けを除いて総釉する。口唇付近内外面に青色の圈線を廻らし、腰部に2条、高台付け根に1条施す。

T.P.1・2

1. 沖縄産陶器 (第15図-10・11) 10は白化粧後に透明釉を施釉する無文碗で、底部から口縁部まで復元できる資料となる。11は沖縄産瓦質土器と思われる短頸の壺口縁部。

T.P.4

1. 青磁 (第15図-12・13) 12は同安窯系の皿で、外面に一部文様が描かれるが欠損が大きく判然としない。13は龍泉窯系V類の外反皿で厚く施釉する。

2. 青花 (第15図-14) 14は青花碗D群の資料で、内外面腰部に2条の圈線、外面にアラベスク文を施文する。

3. 褐釉陶器 (第15図-15) タイ産の褐釉陶器底部資料。胎土の質は悪く底面には砂目が残る。

4. 沖縄産陶器 (第15図-16) 16は沖縄産の鉢。直線的な胴部で、折れ曲がった口縁部は方形状になる。

T.P.5

1. 青磁 (第15図-17~30) 17~19は龍泉窯系V類。17はヘラ描きの雷文碗口縁部。18は見込みに印花文を施す。19は外反皿。20は同VII類稜花皿。21~27は同VI類の細蓮弁文碗。28~30は直口口縁となる粗製碗で漳州窯系とされる口縁部資料。

2. 白磁 (第15図-31) 31はC2群 (ビロースクII・閩清窯系) の口縁部と思われる資料。

3. 褐釉陶器 (第16図-32) 16-32は口縁部を少し肥厚させる壺で、口唇内面の釉を雑に掻き取る。

4. 沖縄産陶器 (第16図-33) 灰釉碗の底部で見込みは凹む。

5. 銭貨 (第16図-34) 約半分を欠損するが武と寶が残ることから洪武通寶 (初鑄: 1368) と思われる。

T.P.6

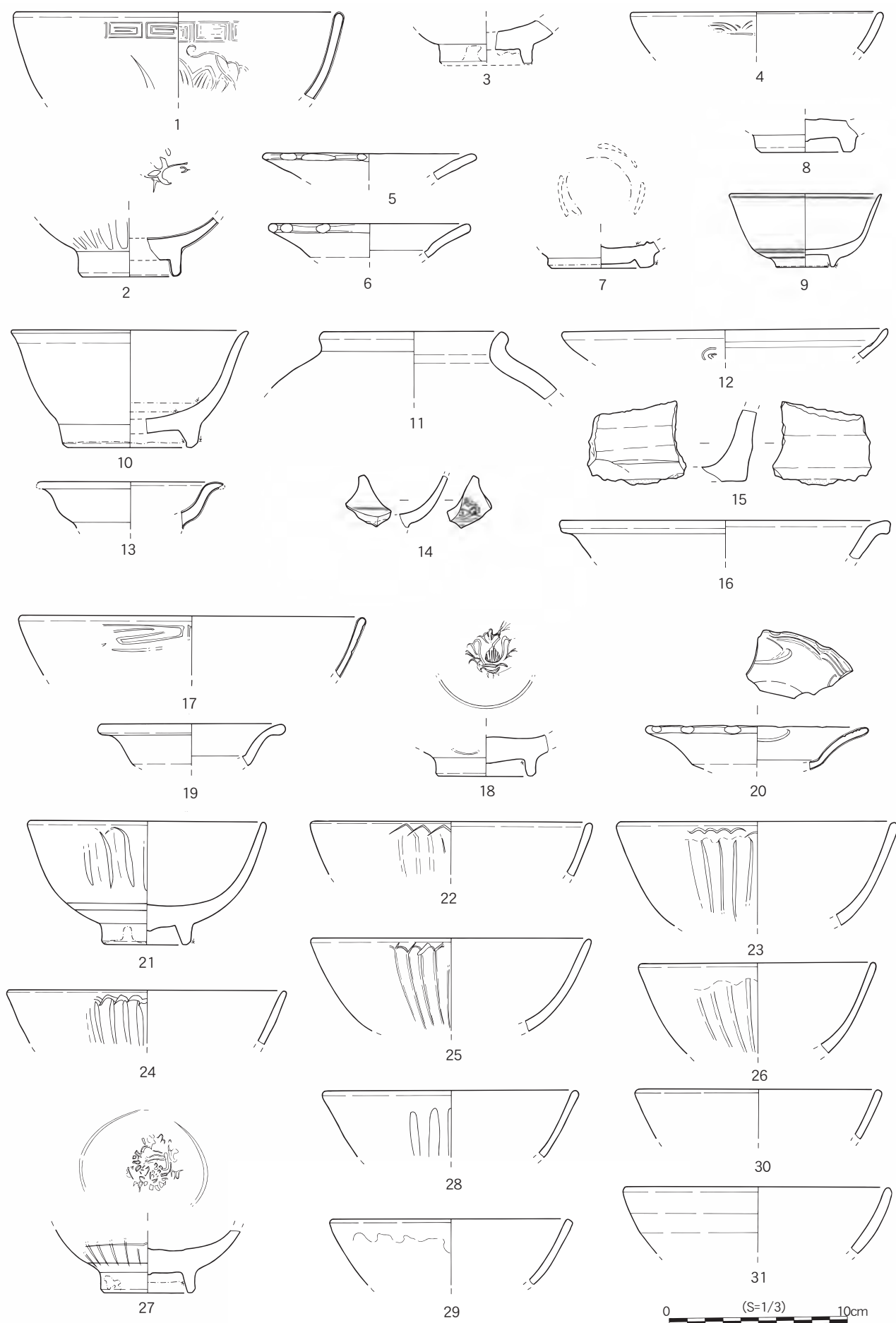
1. 青磁 (第16図-35~40) 35は龍泉窯系V類碗で直線的に開く資料。36~38は同VI類碗でいわゆる細蓮弁文碗。39は同V類皿で外面は蓮弁、見込みには双魚文がスタンプされる。40は同V類の稜花盤で内外面に線彫りによる草花文を施す。

2. 白磁 (第16図-41・42) 41はD'群 (邵武窯系) の碗と思われる資料。内底まで釉はかからない。42はE群 (景德鎮系) の皿。

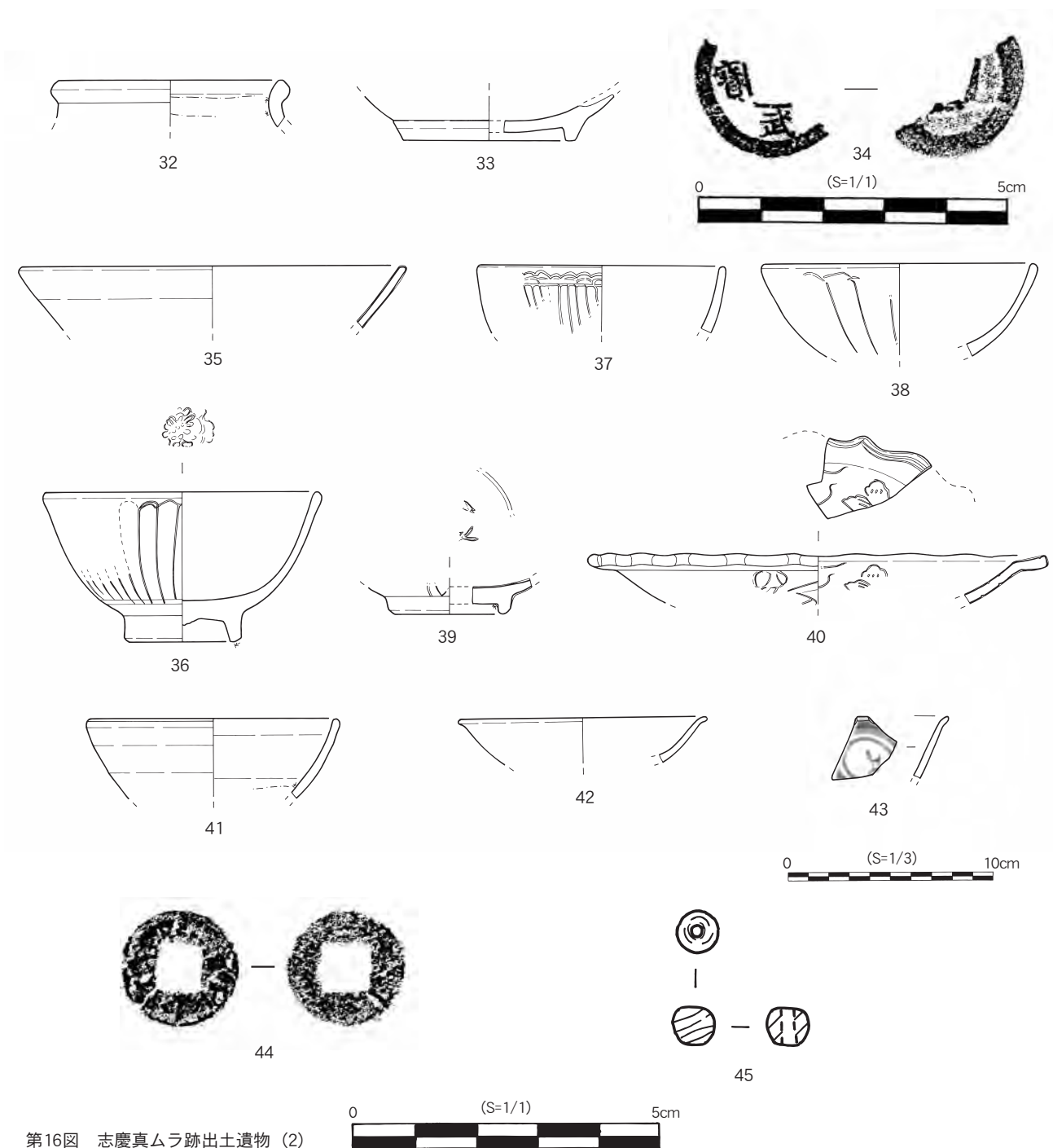
3. 青花 (第16図-43) 漳州窯系碗と思われる口縁部資料。

4. 銭貨 (第16図-44) 無文銭。

5. 玉 (第16図-45) 今帰仁城跡主郭分類b2種の丸玉で、明青色となる。



第15図 志慶真ムラ跡出土遺物 (1)



第16図 志慶真ムラ跡出土遺物（2）

種別	器種	分類	器形・文様等	部位	TP7/I	TP1・2/I	TP1・2/II	TP4/I	TP4/II b	TP3/I	TP5/I	TP5/II	TP5/III	TP6/I	TP6/II b	TP6/III	TP6/遺構内
青磁	碗	龍泉窯系V類	雷文帯	口縁					1		1		2			1	
			無文外反	口縁					1								
			無文直口	口縁													
		龍泉窯系VI類	細連弁文	口縁								2	3	3	3		
			不明	底部									1	1	1		
		龍泉窯系VII類	細連弁文	口縁					2							1	
	皿	粗製品	粗製碗	口縁	2							2					
			不明碗	口縁										1			
			口折皿	口縁							1		1				
			腰折稜花	口縁									2				
		龍泉窯系IV・V類	腰折無文	口縁				1			1	1	1	1			
			不明	底部								1	1				
			龍泉窯系V類	口縁												2	
			龍泉窯系VI類	口縁												1	
白磁	酒会壺	龍泉窯系V類	蓋	蓋									1				
			景徳鎮窯系	E群								1					
	碗	福建邵武窯	D1群(小皿)	胴部									1				
			器種不明	胴部										1	2		
青花	明	C'群	外反	口縁			1										
			不明	胴部		1			1					5			1
褐釉	壺	大型	方形口縁	胴部	1				1				1				
			不明	底部		1											
褐釉陶器	壺	シーサッチャナライ	大型壺	口縁		1											
グスク土器	不明			胴部		1											
宮古系土器	壺			胴部		1											
石器		近現代陶磁(沖縄産)		胴部						2							
			置砥石			1											

第4表 志慶真ムラ跡出土遺物集計表

第4節 周辺遺跡表採遺物

概要

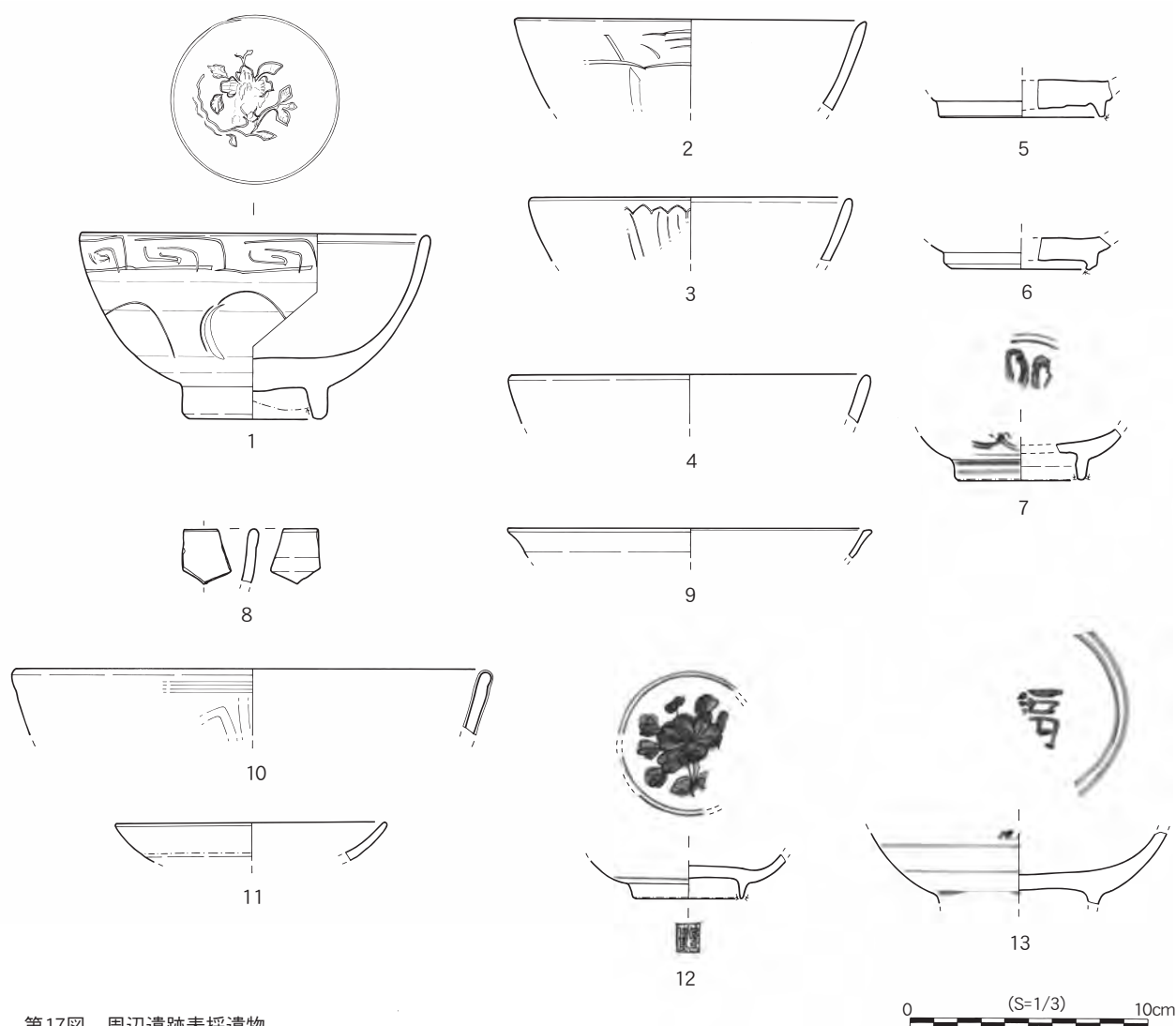
本資料は周辺遺跡を踏査中に表採したり、一般住民によって持ち込まれたり、県道115号線付近の崩落壁より出てきたものである。一部については番地による記載によって表採地点の把握はできているが、できていない資料もある。

1) 遺物

1. 青磁（第17図-1～6、8、10、） 1・2・10はヘラ彫りによる雷文帯碗（龍泉窯系V類）で、1の見込みには印花文を施す。5は同類碗、6は同皿底部。8は同類無文直口碗の口縁部。3・4は龍泉窯系VI類碗。3はいわゆる細蓮弁文碗。蓮弁が細く雑に仕上げられる。4は無文の資料。

2. 白磁（第17図-9、11） 9はD'群、おそらく内底無釉の浅碗になるとされる資料。胎土及び釉はD群とよく似ているが、口径等から碗と判断した。口唇内側は斜位にカットされる。11はD群（邵武窯系）の皿。

3. 青花（第17図-7、12、13） 12はE群の碗底部資料で、饅頭心となり見込みには雑な花文、外底には字款を施す。13は徳化窯系と思われる青花碗で見込みに福字を描く。



第17図 周辺遺跡表採遺物

第5節 石積遺構の調査

概要

今帰仁城跡周辺遺跡周辺ではこれまで行われてきた調査によって様々な石積み遺構が確認されている。ただし本格的な調査は行われていないためいずれの石積みとも用途等は不明な点が多い。

実施された調査は、分布調査によってその石積み群の個数および形態的な特徴の把握確認が行われた（今帰仁村教育委員会1986）。昭和60年度（1985）に実施した分布調査では7群の石積遺構が確認され、それぞれに1～7号の遺構名称が付されている。その後、基本構想の策定時における遺構の分布調査によって、様々な規模形の石積み、石塁が23の地点で確認されている（今帰仁村教育委員会1992）。後者の調査では伐採等は行っておらず遺構の形態的な特徴などの把握は未着手のままとなっている。

上記分布調査によって確認されたのは、規格や規模がそれぞれ異なるため、これらの石積みの測量調査を目的として調査を継続的に実施することとした。これまで詳細な図面が作成された遺構は、第1号石積遺構（ミームングスク）、第2号石積遺構A（シニグンニ）の遺構図を作成している（今帰仁村教育委員会2007）。なお、第1号石積遺構（ミームングスク）については、石積遺構頂部においてレーダー探査を実施するとともに、石積み地下で確認された空洞状の反応があることから、一部試掘調査を実施したが、特に明確な遺構を確認するには至らなかった。また、第2号石積遺構（シニグンニ）は2号石積遺構Bとした円形の石塁状の遺構については測量は未着手となっている。

平成20年度以降に実施された、村内遺跡調査では上記1、2号で実施した精度ではなくても、これらの石積み遺構について、それぞれの形態的な特徴を把握することを目的とし調査を実施した。具体的には平板実測による、石積遺構の測量図作成を行うこととした。平成20年度（2008）8月1日～2008年8月14日に周辺遺跡第16次調査として名称不詳の石積遺構（仮称ナガレ庭）についての測量調査、平成21年度（2009）8月1日～14日に周辺遺跡第18次調査として第6号石積遺構（チンマーサ）についての測量調査を実施した（第3・4図）。

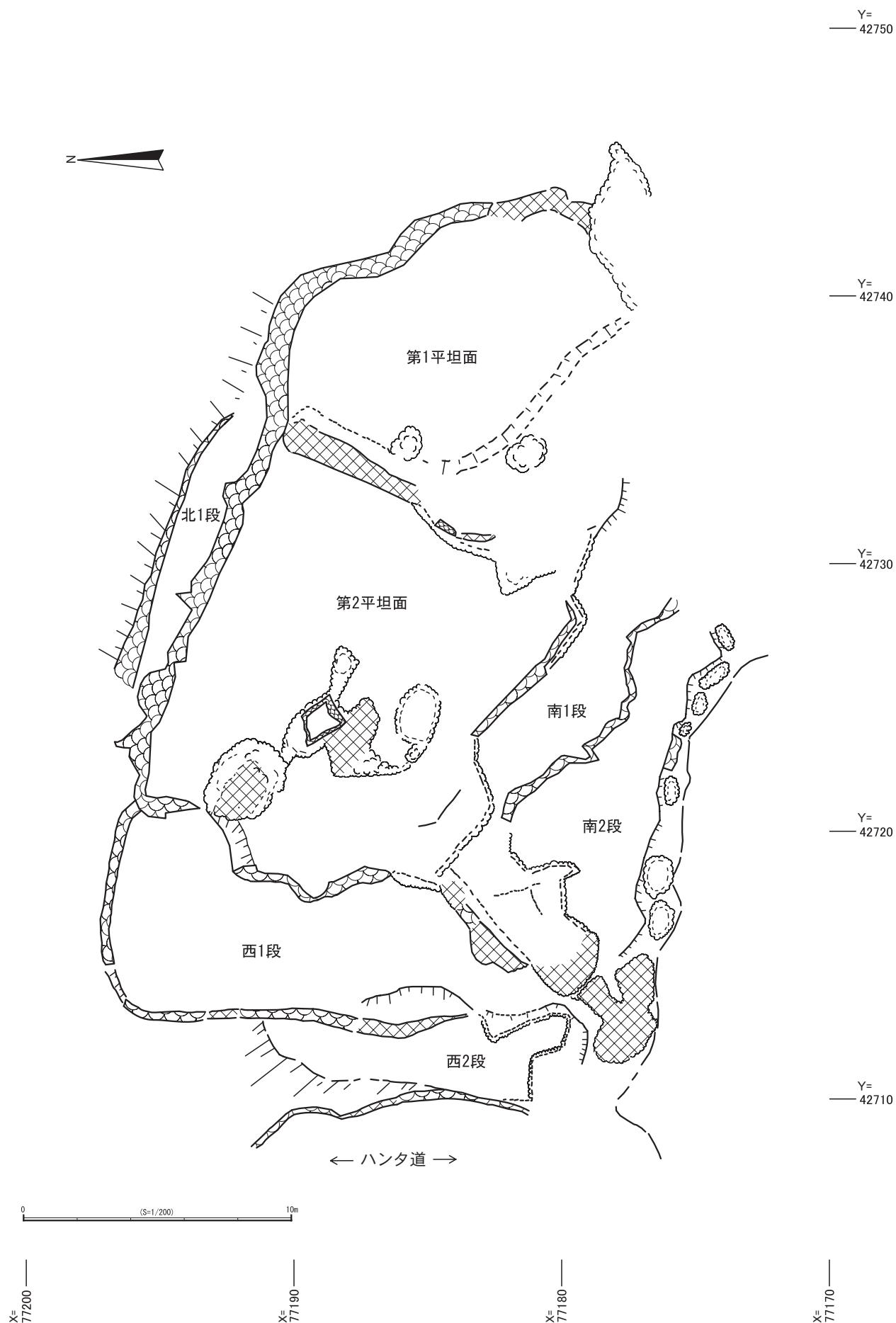
1) 石積遺構 a（仮称：ナガレ庭）

今帰仁村歴史文化センターが保管する「國頭郡今帰仁間切今泊全図」は明治36年（1903）に作成、もしくは36年の図面を基礎に作成された今泊の地積図である。図面は縦78.6cm、横53.2cmを測る。明治36年の図面の他にも明治41年以後に作成された「国頭郡今帰仁村字今泊」「国頭郡今帰仁村今泊全図」などが保管されている。なお、これらの図面を含む間切各村全図72点は平成19年度に村の指定文化財となっている。

この図面は着色によって土地の利用状況が区分されているので、明治36年段階における土地利用状況を復元する上で基礎的な資料になると考えられる。字図は墨で描き、河川・溝渠・池沼・海については藍色で薄く彩色。村・区図には河海・池沼・など水部は藍を淡彩し、道路は朱色、宅地は朱色の淡彩、不耕地は緑、堤とうは墨を薄く施すなどのルールがあったとされる（崎浜2008）。実際にはこの他にも黄色、褐色に着色された場所や、番号などが付されるなどの情報が地図には記されている（第3図）。

この地積図を観察すると、褐色に着色された場所が、現在の火之神の祠や拝所の所在する場所とほぼ一致する。具体的には②阿応理屋恵、③今帰仁、④供のカネ各ノ口火之神の祠が所在。⑤は古宇利殿内、⑥は主郭に所在する通称里主火之神の祠の位置を示している。

この地積図で、現在指定地となっている場所で同色で着色された場所が①である。①の場所は現



第18図 石積遺構a 詳細図

在の地積図では今泊1695番地あたりと考えられることから、ハンタ道沿いに所在する当該地域について2007年度に伐採調査を実施した。

伐採した結果この場所が自然の丘陵地を利用し、斜面を削平造成し、端部には石を積んで道に面して複数のテラスを持った遺構であることが確認された。この新たに発見された遺構が何であるのかは不明であるが、ハンタ道沿いにある、今泊区の拝所など聖域などに着色されている土地であることから、祭祀を行う施設と考えられた。地元の方からの聴き取り調査など今後の課題も残しているが、現在のところ用途不明の遺構として紹介せざるを得ない。

大正以降に記録される、今帰仁城で行われる諸種の参拝行事で当該地を拝む行為は記録されていないので断定できないものの、『琉球国由来記』（1713年）の海神祭の記事に以下のような記載がある。

「毎年七月に行われる大折目（ウブユミ）は海神祭（ウンジャミ）のことで、稲穂のみのりのために、ノロ・大根神・居神など総計20人余りが、城内（今帰仁内）のヨウスイという所にタモトをそへ、按司地頭と惣地頭から出された花米と五水（酒）で祭祀をし、アワシ川の水をとり、ノロ・大根神は浴びて、七度アザナを廻ったあと、庭で酒を振舞う。その酒は按司から出される。その後、縄を引っ張って、船漕ぎの真似をする。

それから城門の外から惣様（惣地頭のことが）は馬に乗り、弓矢を持って、ナガレ庭という所に参り、それからシバンティナの浜まで行き塩撫でをする。さらに戻り親川に行って水撫でをして、再び城内に戻り、ヨウスイで祭祀を行う。

大折目（海神祭）のコースは、ヨウスイ（タモト）→アワシ川→（浴びる）→アザナ回り（七度）→庭（ウミヤー：大庭）→（船漕ぎの所作）→城門→（惣様馬に乗り）→ナガレ庭→（塩撫：シバンティナの浜？）→親川（エーガー：水撫）→城内のヨウスイへ。

今回の発見は、今帰仁グスクで行われた海神祭のコースのナガレ庭ではないか（中略）他の地域でのナガレ庭は神送りの場所となっているので、そこは最適な場所である。ナガレ庭の次に塩撫とある。現在、塩撫でと神送りはシバンティナの浜で行っているの、塩撫での場所はシバンティナの浜とみてよさそうである。（中略）ナガレ庭で神人がヌミを持って神送りをする場所としては、海が見通せる最適な場所である。（註1）

上記の記載内容から、石積遺構は「ナガレ庭」に該当する可能性があると考えられる。しかし、断定はできないことから、当面は名称不詳の石積み遺構aとして仮称し、既存の1～7号石積遺構以後、名称を付す場合にはa,b,c・・・として名称を付すこととした（今帰仁村教育委員会2009）。

石積み遺構は標高42.56mの小丘に築かれていて、東西33m、南北22mの規模で、東側の丘陵頂部の第1平坦面、西に第2平坦面が配され、1－2間は低平で簡素な崩落石で画されており同ライン南側は岩盤となっている。第2平坦面が主体部と考えられ、やや西寄りの自然岩盤上に簡易に礫が積まれている。第2平坦面の北には細長い平坦面を北1段。南2段。西2段が配されている。それぞれの平坦面の間は粗造な石積みで土留めされており、テラス間の段差をつくり出している。石積みのライン上には所々で岩盤が見られることから自然地形を利用して石積みを配し、方形プランのテラスを意図して造作されたことが伺える。

遺物は沖縄産陶器などの近現代の陶器片などが回収されたが、いずれも胴部片等であった。なお、試掘等は行っていないので今後これら遺構に関する調査は整備計画とあわせて検討されるべきである。

註1）今帰仁村歴史文化センターのHPの「歴史文化センターの動き」2007年11月の動き（<http://rekibun.jp/0711ugoki.html>）をより引用。

2) 第6号石積遺構（チンマーサ）

第6号石積遺構は標高74mの丘陵上に構築された小規模の石積遺構が3基から構成される（第3・4図）。丘陵頂部はゆるやか北側に傾斜するものの狭小ながら平坦な空間となり、3基の石積遺構の箇所それぞれ岩盤が露頭している。地元では丘陵地はチンマーサと呼ばれているとされる。チンマーサは方言の積み回すの意と解されるが定かではない。

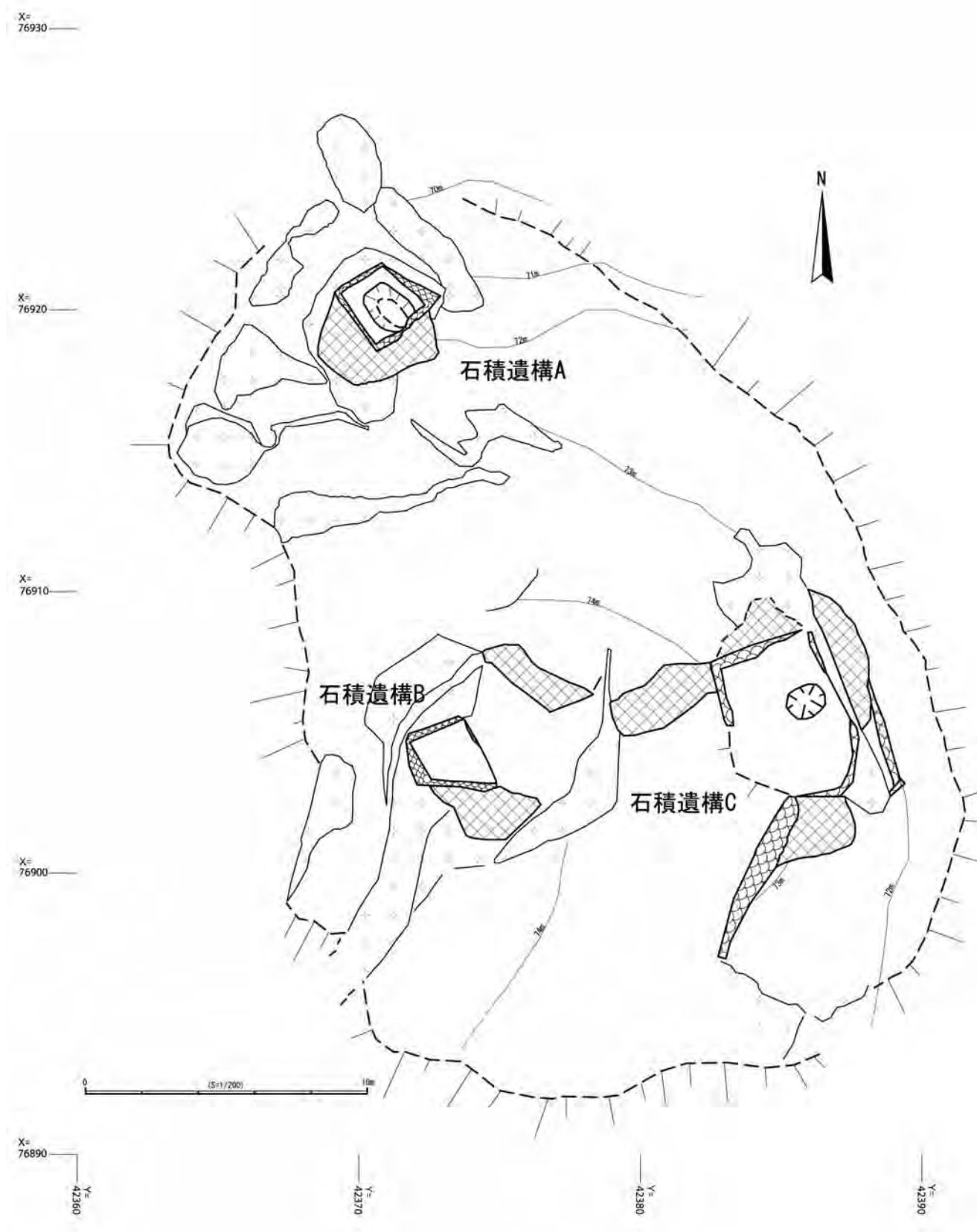
3基の石積遺構はそれぞれ6号A、B、Cとして既に報告（今帰仁村教育委員会1986）されるのでこれに従った。

第6号石積遺構Aは最も北に位置し、Bは南西、Cが東側に配される。いずれも基盤岩である古期石灰岩を積み上げたもので、岩盤を縁取るように概ね方形を意識して積み上げられている。

Aは3基の遺構の中でも最も低い場所にあって、切り立った岩盤の上に石積みを配する。標高は最高所で74.14mを測り、形状はやや台形状になり、短軸約2m×長辺約3mで、岩盤の縁に積み上げられるため中央部は凹み、「凹」形となっている。石積みは岩盤から1.2mほど積み上げた箇所も見られるが全体的に低い。東側は岩盤が立ち上がるため独特の景観をつくっている。周辺からの遺物の採集は無いため遺構の構築年等については不詳である。

Bは3基の遺構の中でも最も高い場所にあって、ややなだらかな岩盤の上に石積みを配する。標高は最高所で76.02mを測り、形状はやや台形状になり、短軸約2m×長辺約2.5mで、岩盤からの積み上げも20～30cm程度と低平となっている。丘陵端にあるため現在は雑木が多いが、伐採すれば当該地からの眺望は開けると考えられる。やはり周辺からの遺物の採集は無いため遺構の構築年等については不詳である。

Cは3基の遺構の中でも最も規模が大きく、特に東側壁の切り立った岩盤は約2mほど岩盤が露出して独特の景色をつくる。標高は最高所で74.64mを測り、形状はやや長方形になり、短軸約4.5m×長軸約5mで、A同様岩盤縁に積み上げられるため中央部は短軸1m×長軸1.5m×深さ0.3m程度の凹みが認められる。西側に位置するBとは8.5mほど離れているが、雑然と積まれた石積みがB側へ延びており、また南側には土留め状の石積みが配されB－C間は若干平坦な空間となっている。Cの石積み自体は岩盤から20～30cmほど積み上げた全体的に低い石積みとなっている。栗石に周囲の古期石灰岩と異なる石質の礫が見られるが、特に周辺からの遺物の採集は無く、当該遺構についてもA B同様にその機能用途等是不詳である。



第19図 第6号石積遺構（チンマーサ）詳細図

図	地区	種別	器種 時代 形式	分類	文様等	器:口径 他:外径 銭:外径単 位=cm (銭 以下mm)	器高 厚さ 銭厚 単位=cm (銭以下 =mm)	器:底径 重量 重量 (単位=g)	次	区	グ'リット'	層	遺構	dot	No.	備考
7-1	今帰仁ムラ跡	カムイヤキ		B群		—	—	—	17次	13		表探			17	胴部
7-2	今帰仁ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	14.4	—	—	17次	13		I			13	口縁部
7-3	今帰仁ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	12.7	—	—	17次	13		I			7	口縁部
7-4	今帰仁ムラ跡	青磁	碗	粗製		15.1	—	—	17次	13		I			9	福建・広東系の白磁?
7-5	今帰仁ムラ跡	青磁	碗	VI類		—	—	4.8	17次	13		表探			17	底部
7-6	今帰仁ムラ跡	青花	碗	D群		—	—	—	17次	13		表探			17	胴部
7-7	今帰仁ムラ跡	施釉陶器	鉢			21.0	—	—	17次	13		I			4	沖縄産・口縁部
7-8	今帰仁ムラ跡	無釉陶器	壺			16.2	—	—	17次	13		I			7	沖縄産・口縁部
7-9	今帰仁ムラ跡	不明	瓶			—	—	7.7	17次	13		表探			17	青白磁?ベトナム?
10-1	親泊ムラ跡	カムイヤキ		A群		—	—	—	13次	C		II			15	胴部 格子目の当て具痕
10-2	親泊ムラ跡	青磁	碗	V類	雷文	17.0	—	—	13次	C		II			15	
10-3	親泊ムラ跡	青磁	碗	V類		15.3	—	—	13次	C		II			15	草花文
10-4	親泊ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	—	—	—	13次	C		II			15	
10-5	親泊ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	13.3	—	—	13次	C		I			2	
10-6	親泊ムラ跡	青磁	碗	V類		—	—	6.2	13次	C		I			2	
10-7	親泊ムラ跡	青磁	碗	VI類		—	—	6.7	13次			III			16	
10-8	親泊ムラ跡	青磁	皿	VI類		12.5	—	—	13次	C		I			2	腰折稜花皿
10-9	親泊ムラ跡	青磁	皿	V類		—	—	5.0	13次	B		I			61	底部
10-10	親泊ムラ跡	白磁	碗	C1群		—	—	—	13次	B		I			1	ビロースクⅠ
10-11	親泊ムラ跡	白磁	碗	C2群		—	—	—	13次	C		I			2	ビロースクⅡ
10-12	親泊ムラ跡	白磁	碗	C2群		—	—	—	13次	C		I			4	ビロースクⅡ
10-13	親泊ムラ跡	白磁	皿	E群		—	—	8.3	13次	B		I			1	
10-14	親泊ムラ跡	青花	碗	C群		—	—	—	13次	B		I			1	主郭Ⅲ類
10-15	親泊ムラ跡	青花	碗	D群		13.6	—	—	13次	C		I			7	主郭Ⅴ類
10-16	親泊ムラ跡	青花	碗	D群		13.1	—	—	13次	C		I			4	主郭Ⅴ類
10-17	親泊ムラ跡	青花	碗	C群		—	—	5.0	13次	B		I			1	主郭Ⅲ類
10-18	親泊ムラ跡	青花	碗	D群		—	—	5.4	13次	C		I			4	主郭Ⅴ類
10-19	親泊ムラ跡	青花	碗	D群		—	—	5.2	13次	B		I			1	主郭Ⅴ類
10-20	親泊ムラ跡	青花	皿	C群		9.8	—	—	13次	C		I			2	碁笥底
10-21	親泊ムラ跡	褐釉	壺			9.6	—	—	13次	C		II			15	
10-22	親泊ムラ跡	銭貨	1697	寛永通寶		外径22.75 内径17.92	1.29	3.02	13次	C		I			4	新寛永 孔径 縦(5.64) 横(5.68)
10-23	親泊ムラ跡	玉	ビーズ	丸玉	C	長さ 2.80	幅 3.66	0.05	13次	C		I			4	孔径1.18 (mm)
15-1	志慶真ムラ跡	青磁	碗	V類	雷文帯	18.3	—	—	14次		F-47	II		5		
15-2	志慶真ムラ跡	青磁	碗	V類	蓮弁文	—	—	5.4	14次		F-47	I			36	
15-3	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	—	—	4.9	14次			表探			1	
15-4	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VII類	波状文	14.1	—	—	14次		F-47	II			34	
15-5	志慶真ムラ跡	青磁	皿	VII類	稜花	11.7	—	—	14次		F-47	II		4		腰折稜花皿
15-6	志慶真ムラ跡	青磁	皿	VI類	稜花	11.2	—	—	14次		F-47	II		4		腰折稜花皿
15-7	志慶真ムラ跡	青磁	皿	VII類		—	—	5.6	14次		F-47	I			7	腰折れ
15-8	志慶真ムラ跡	白磁	碗			—	—	5.2	14次		F-47	I			7	
15-9	志慶真ムラ跡	近代染付	小碗			8.5	4.1	3.2	14次		F-47	I			6	
15-10	志慶真ムラ跡	沖縄産	碗	施釉陶器		13.2	6.6	7.0	14次	TP1・2		I			32	
15-11	志慶真ムラ跡	沖縄産	壺	瓦質土器		10.2	—	—	14次	TP2		I			3	orカムイヤキ
15-12	志慶真ムラ跡	青磁	皿	同安窯系		18.2	—	—	14次	TP4	J-46	IIb			12	
15-13	志慶真ムラ跡	青磁	皿	V類		10.2	—	—	14次	TP4	J-46	IIb			18	腰折外反皿

第5表 遺物観察表 (1)

図	地区	種別	器種 時代 形式	分類	文様等	器：口径 他：外径 銭：外径単 位＝cm（銭 以下mm）	器高 厚さ 銭厚 単位＝cm （銭以下 mm）	器：底径 重量 重量 （単位＝g）	次	区	グリップ	層	遺構	dot	No.	備考
15-14	志慶真ムラ跡	青花	碗	D群		—	—	—	14次	TP4	J-46	I			9	胴部
15-15	志慶真ムラ跡	褐釉	壺	タイ産		—	—	—	14次	TP4	J-46	II b			12	
15-16	志慶真ムラ跡	沖縄産	鉢			18.6	—	—	14次	TP4	J-46	I			9	
15-17	志慶真ムラ跡	青磁	碗	V類	雷文帯	19.3	—	—	14次	TP5	J-47	III			23	
15-18	志慶真ムラ跡	青磁	碗	V類		—	—	5.4	14次	TP5	J-47	III			23	
15-19	志慶真ムラ跡	青磁	皿	V類		10.3	—	—	14次	TP5	J-47	III			22	腰折れ外反皿
15-20	志慶真ムラ跡	青磁	皿	VI類		12.4	—	—	14次	TP5	J-47	III			25	腰折れ外反・稜花皿
15-21	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	13.4	6.9	4.7	14次	TP5	J-47	III		1		
15-22	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	15.6	—	—	14次	TP5	J-47	III			23	
15-23	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	15.4			14次	TP5	J-47	III			22	
15-24	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	15.6			14次	TP5	J-47	III			22	
15-25	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	15.7	—	—	14次	TP5	J-47	II b			13	
15-26	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	13.2	—	—	14次	TP5	J-47	III			22	
15-27	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	—	—	5.1	14次	TP5	J-47	III		2		
15-28	志慶真ムラ跡	青磁	碗	粗製	蓮弁文	14.2			14次	TP5	J-47	III			28	漳州
15-29	志慶真ムラ跡	青磁	碗	粗製	無文	13.4	—	—	14次	TP5	J-47	II b			19	漳州
15-30	志慶真ムラ跡	青磁	碗	粗製	無文	13.7	—	—	14次	TP5	J-47	II b			19	漳州
15-31	志慶真ムラ跡	白磁	碗	C2群		14.9	—	—	14次	TP5	J-47	I			15	
16-32	志慶真ムラ跡	褐釉	壺			11.0	—	—	14次	TP5	J-47	I			22	
16-33	志慶真ムラ跡	沖縄産	碗	施釉陶器		—	—	8.4	14次	TP5	J-47	II b			19	
16-34	志慶真ムラ跡	銭貨	1368	洪武通寶		—	1.65	1.85	14次	TP5	J-47	III			30	洪と通の2文字欠損
16-35	志慶真ムラ跡	青磁	碗	V類	無文	18.8	—	—	14次	TP6	I-47	I			16	無文直口碗
16-36	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	13.4	7.3	5.2	14次	TP6	I-47	III		3		
16-37	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VI類	細蓮弁	11.9	—	—	14次	TP6	I-47	II b			20	
16-38	志慶真ムラ跡	青磁	碗	VII類	細蓮弁	13.2	—	—	14次	TP6	I-47	II b			21	
16-39	志慶真ムラ跡	青磁	皿	V類	蓮弁文	—	—	5.4	14次	TP6	I-47	II b			21	口折皿？（双魚文）
16-40	志慶真ムラ跡	青磁	盤			22.2	—	—	14次	TP6	I-47	II b			20	錦縁・稜花盤
16-41	志慶真ムラ跡	白磁	碗	D'群		12.1	—	—	14次	TP6	I-47	III			24	内底無釉
16-42	志慶真ムラ跡	白磁	皿	E群		12.0	—	—	14次	TP6	I-47	II b			20	外反皿
16-43	志慶真ムラ跡	青花	碗			—	—	—	14次	TP6	I-47	II b			20	漳州
16-44	志慶真ムラ跡	銭貨		無文銭		18.75	0.85	0.56	14次	TP6	I-47	I			16	孔径 縦(7.32) 横(7.65)
16-45	志慶真ムラ跡	玉	ビーズ	III類	b 2	長さ6.19	幅7.04	0.5	14次	TP6	I-47	II b			21	孔径1.95 (mm)
17-1	周辺遺跡表探	青磁	碗	V類	雷文	14.7	7.9	5.7				表探			1	5032番地
17-2	周辺遺跡表探	青磁	碗	V類	雷文	14.8	—	—				表探			1	5032番地
17-3	周辺遺跡表探	青磁	碗	VI類	細蓮弁	13.6	—	—				表探			8	4933番地
17-4	周辺遺跡表探	青磁	碗	VI類		15.3	—	—				表探			8	4933番地
17-5	周辺遺跡表探	青磁	碗	V類		—	—	6.9				表探			8	4933番地
17-6	周辺遺跡表探	青磁	碗	V類		—	—	6.0				表探			8	4933番地
17-7	周辺遺跡表探	青花	碗	D群		—	—	5.3				表探			8	4933番地
17-8	周辺遺跡表探	青磁	碗	V類		—	—	—				表探			7	4994番地
17-9	周辺遺跡表探	白磁	皿	D'群		15.5	—	—				表探			7	4994番地
17-10	周辺遺跡表探	青磁	碗	V類	雷文	20.0	—	—				表探			4	表探地点不明
17-11	周辺遺跡表探	白磁	皿	D群		11.6	—	—				表探			4	表探地点不明
17-12	周辺遺跡表探	青花	碗	E群		—	—	4.6				表探			3	表探地点不明
17-13	周辺遺跡表探	青花	碗			—	—	—				表探			5	表探地点不明

第6表 遺物観察表（2）

第Ⅳ章 今帰仁城跡主郭東側斜面出土の植物遺体

千田 寛之
札幌大学古食性分析室

遺跡および調査の概要

遺 跡 の 名 称：今帰仁城跡
調 査 地 点 名：今帰仁城跡 主郭東側斜面
遺 跡 の 位 置：沖縄県今帰仁村字今泊
発掘調査機関：今帰仁村教育委員会
発掘担当者：宮城 弘樹
発掘調査期間：平成10年度～平成14年度
遺 跡 の 年 代：グスク時代 14世紀後半～16世紀中頃

1 分析の経緯

現在は修復作業が完了し見事な城壁を見ることの出来る主郭東側城壁も、以前は城壁の一部が崩落し斜面に散乱する状態にあった。そのため2000年～2002年に掛け、今帰仁村教育委員会により東側斜面の崩落石撤去工事が実施されている。崩落石を撤去したところ、主郭由来と考えられる遺物と共に大量の土壌が確認された(宮城弘樹2008,私信による)。土壌はその場で5mmのフルイを用いて遺物を取り除いたあと、フローテーション処理によって微細な人工遺物および動植物遺体の検出を行うため回収された。城壁が崩落していたことに加え観光地として利用されてきた経緯から、土壌には現代のゴミ等も相当数含まれていた。しかし発掘担当者の宮城弘樹によると、後世の明らかな混入を除き回収された遺物はすべてグスク時代に相当するものと考えて差支えないとのことである(宮城弘樹2008,私信による)。

今帰仁城跡では1980年代に二の郭に相当する志慶真門郭の発掘調査が実施され、イネやムギの植物遺体が回収されている(今帰仁村教育委員会1983)。だが、主郭由来の土壌をフローテーション処理し、植物遺体を回収する試みはこれまで行われていない。そのため、今日までは主郭における植物食利用が十分に理解されていなかった。今回、主郭由来の土壌をフローテーション処理し植物遺体分析を行うことにより、エリート層の植物食利用を理解する上で貴重なデータが得られると考えられる。分析は主郭東側斜面よりサンプリングされた土壌の一部計102リットルを使用し、フローテーション処理によって植物遺体を検出した。その結果、計2,248(粒/片)の植物遺体が確認されている(表1)。

2 今帰仁城跡主郭東側斜面出土の植物遺体

イネ *Oryza sativa* L.

イネ穎果が計97(粒) およびイネ穎果の破片が計182(片) 検出された。検出されたイネ穎果のうち43(粒) が計測可能であった(表2)。平均サイズ(長さ×幅×厚さ)は4.0mm×2.4mm×1.6mmである。また、イネ穎果と思われるが、保存状態が悪く断定できない計9(片) をイネ? に分類した。このほか、イネ籾が計4(片) およびイネの小穂軸(写真2/サイズ1.0mm×0.9mm×0.5mm) が計11(片) 検出された。また、イネの小穂軸部分と思われるが特徴が欠落しているため断定出来ない計5(片) をイネ小穂軸? に分類している。写真1のイネ穎果のサイズ(長さ×幅×厚さ)は4.8mm×3.1mm×1.6mm。

コムギ *Triticum aestivum* L.

コムギ穎果が計38（粒）およびコムギ穎果の破片が計28（片）回収された。また、コムギ穎果と思われるが保存状態が悪く断定出来ないものをコムギ？に分類し、計1（片）をこのカテゴリーに含めている。回収されたコムギ穎果のうち、計11（粒）が計測可能であった(表3)。計測の結果、平均サイズ(長さ×幅×厚さ)が3.5mm×2.4mm×1.9mmであることから、検出されたコムギ穎果は小型コムギに属するものと思われる。写真3のコムギ穎果のサイズ(長さ×幅×厚さ)は3.3mm×2.1mm×1.6mm。また、コムギの小穂軸(写真5／サイズ1.7mm×1.4mm×0.5mm)がLF7より1（片）確認されている。

オオムギ *Hordeum vulgare* L.

オオムギ穎果が計22（粒）およびオオムギ穎果の破片が13（片）検出された。検出されたオオムギ穎果のうち2（粒）が計測可能であった(表4)。平均サイズ(長さ×幅×厚さ)は5.5mm×2.9mm×1.9mmである。写真4のオオムギ穎果のサイズ(長さ×幅×厚さ)は6.0mm×2.7mm×1.8mm。

ムギ類

穎果の保存状態が悪いまたは一部分しか残存していないため、コムギあるいはオオムギの分類が困難な穎果をムギ類とし計45（片）をこのカテゴリーに含めた。

アワ *Setaria italica* (L.) Beauv.

アワ穎果が計593（粒）およびアワ穎果の破片が計202（片）回収された。同定されたアワ穎果のうち、計測可能な種子の中からランダムに計40（粒）を抽出し計測をおこなった(表5)。平均サイズ(長さ×幅×厚さ)は1.2mm×1.1mm×0.9mmである。また、アワ穎果と思われるがアワ穎果と断定するには特徴が欠落している計53（片）をアワ？に分類した。このほかアワの内外穎が1（片）検出されている。写真6のアワ穎果のサイズ(長さ×幅×厚さ)は1.3mm×1.3mm×1.2mm。

キビ *Panicum miliaceum* L. ?

キビ穎果と思われるが特徴が欠落しているため断定出来ないものをキビ？とし1（片）を分類した。

ミレット

おそらくアワまたはキビだと思われるが、それ以上の分類が不可能な穎果をこのカテゴリーに含めた。計6（片）が検出されている。

堅果皮

堅果皮の破片が計38（片）回収された。いずれも細かく破碎されている。

ホルトノキ *Elaeocarpus sylvestris* var. *ellipticus*

ホルトノキの核果が計4（片）確認された。種皮には凹点によって構成された網目模様が観察される。写真7のサイズ(長さ×幅×厚さ)は9.7mm×4.6mm×0.5mm。

タデ科 Polygonaceae

タデ科の瘦果が1（粒）同定された。種子の形状は広卵状円形をしており、断面はほぼ三角形状である。

写真8のサイズ(長さ×幅×厚さ)は0.7mm×0.6mm×0.6mm。

マメ科 Fabaceae

マメ科の豆果片が計5 (片) 確認された。種子の形状は長楕円形で、へそが確認できる。写真9のサイズ(長さ×幅×厚さ)は5.6mm×3.2mm×2.7mm。

カヤツリグサ科 Cyperaceae

・カヤツリグサ科の瘦果が計4 (粒) 同定された。種子の形状は広倒卵形で側面観は平凸レンズ形である。種皮には縦にうっすらと線状のパターンが観られる。写真10のカヤツリグサ科瘦果のサイズ(長さ×幅×厚さ)は1.7mm×1.3mm×0.5mm。

不明種子 Unknown

・不明種子A(写真11) LF9およびLF15より計2 (粒) 検出された。種子の形状は広倒楕円形である。種皮のパターンは確認できない。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は2.9mm×3.1mm×3.0mm。

・不明種子B(写真12) LF3より1 (粒) 確認された。種子の形状は長楕円形をしており、断面はほぼ三角形である。三角形の各先端部分は鋭い。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は1.3mm×0.8mm×0.7mm。

・不明種子C(写真13) LF3より1 (粒) 検出された。種子の形状は圧偏卵形をしており、種皮にはうっすらと斑状模様が確認できる。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は0.6mm×0.7mm×0.4mm。

・不明種子D(写真14) LF11より1 (粒) 同定された。種子の形状は幅の広い扇形で、側面観は線状長楕円形である。基部にへその様なものが確認できる。種皮には不明瞭な横隆条が存在する。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は0.9mm×0.7mm×0.3mm。

・不明種子E(写真15) LF12より1 (粒) 回収された。種子の形状は扇方をしており、側面観は平凸レンズ形である。種皮にはうっすらと網目模様が観察される。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は1.0mm×0.7mm×0.2mm。

・不明種子F(写真16) LF12より1 (粒) 確認された。種子の形状は卵型をしており、側面観は広線形である。種皮全体に微細な凸点によって構成された斑状模様が確認できる。中央部分に不鮮明であるが、へその様なものが観察される。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は1.0mm×0.7mm×0.3mm。

・不明種子G(写真17) LF16より1 (粒) 検出された。種子の形状は広楕円形をしている。種皮の状態は確認できない。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は6.1mm×2.9mm×3.0mm。

・不明種子H(写真18) LF16より1 (粒) 同定された。種子の形状は腎臓状円形をしており、基部にはへその様なものが確認できる。種皮には不明瞭な凸点によって構成された、斑状模様がうっすらと観察される。種子のサイズ(長さ×幅×厚さ)は1.2mm×1.3mm×0.4mm。

同定不可能

保存状態が極めて悪く同定不可能であった計874 (片) をこのカテゴリーに含めた。

表 1 主郭東側斜面出土の植物遺体

LF No.	土壌サンプル量 (g)	浮遊物量 (g)	イネ		イネ?	イネ粉	イネ小穂軸	イネ小穂軸?	コムギ		オオムギ		ムギ類	コムギ小穂軸	コムギ?	アウ		アウ内外類	アウ?	ギビ?	ミソット	堅果皮	ホルトノキ	タデ科	マメ科	カヤツリグサ科	不明種子	同定不可能	計	植物遺体分布密度 (遺体数／リットル)
			粒	片					粒	片	粒	片				粒	片													
1	3	—	9	3		1	2		1	1		2	3			22	10				26						223	303		
2	3	—	4	3					1			1	2		4	6	4				4		2				36	67		
3	6	17.7	6	3						1	3	1				9										2	7	32		
4	7	18.16	7	4		1			3		1		1			25	7										17	66		
5	6	22.3	4	5	2		1		2		1					19	7		8	1	1			2		16	69			
6	5.5	12.45		7					1	1		1	2		4	13	2										16	47		
7	6	21.05	13	15		1	3		2	2	1		3	1		39	14				1	3					50	152		
8	6	28.85	3	11					1	1	2	1	1		2	20	6					1					18	67		
9	7.5	21.8	11	31	2	1			7	2	5	2	8		3	98	25						2			1	92	291		
10	6	30.82	13	44	2			2	2	3	1	1	5		1	138	72		15		4	1					119	423		
11	7	20.54	2	6	1		3		5	4	2	1	4			29	9		2							1	27	96		
12	5.5	53.49	6	4					1	1			1			17	4				1					1	26	63		
13	6	20.52	2	4	1				2	2	2		3			23	5	1	3					1			38	87		
14	7	22.88	5	16					4	5			5			73	16		3			1			5	1		68	202	
15	7	15.9	5	4					3	3	1	1	1			23	10		1							1	31	84		
16	7	26.06	2	8				1	1	1	2	1	2			14	4		3								2	32	73	
17	6.5	29.85	5	14	1		2	2	2	2	1	1	4			25	7		1			1					58	126		
計	102	362.37	97	182	9	4	11	5	38	28	22	13	45	1	1	593	202	1	53	1	6	38	4	1	5	4	9	874	2248	22.1

※LF No.1・2 は現地で分析・同定作業を行ったため、浮遊物量の計測を行なうことが出来なかった。

※50%以上欠損しているものを破片に分類している。

表 2 主郭出土のイネのサイズ

LF No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	LF No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
LF 1	4.6	2.6	2.5	LF 8	4.8	2.5	1.7
"	4.2	2	1.2	"	3.2	1.6	0.9
"	4.4	2.2	0.9	LF 9	5	2.7	2
"	3.3	2.8	1	"	4.7	2.5	2
LF 2	3.9	2.4	1.6	"	4.4	3	1.7
"	2.4	1.7	0.9	"	2.8	1.9	1.4
LF 3	4.2	2.6	2.1	"	4	2	1.4
"	4.6	2	1.2	LF 10	4.4	2.9	2.5
"	3.9	1.7	1	"	4.2	2.7	1.6
"	3.4	1.5	1	"	4.4	2.5	2.2
LF 4	3.4	2.4	2	"	4.1	2.7	1.6
"	4.8	3	1.8	"	4	2.2	1.3
"	4.8	3.1	1.6	"	3	2	1.4
"	4.6	2.6	2	LF 11	4.3	2.6	1.6
"	4.3	2	1.6	LF 12	4.3	2.6	1.8
"	3.9	2	1.3	LF 13	3.1	2.1	1.2
"	3.5	2	1	LF 14	4.6	2.3	1.7
LF 7	4.3	2.8	1.9	"	3.7	2.5	2
"	4.2	2.4	1.7	LF 15	4.9	3.9	1.2
"	4	2.1	1.7	"	4.1	2.8	1.5
"	3.7	1.9	1	LF 16	4.8	2.6	1.7
"	2.9	1.6	0.8	平均	4	2.4	1.6

表 3 主郭出土のコムギのサイズ

LF No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
LF 1	3.6	2.5	2
LF 4	3.3	3.1	2.3
LF 5	3.3	2.6	2.1
LF 9	3.2	2.2	1.9
"	3.3	2.1	1.6
LF 10	3.8	2.3	1.8
LF 11	3.5	2.2	1.9
"	4.2	2.7	2.1
LF 11	3.5	2.3	1.9
LF 14	3.5	2.3	2
LF 17	3.2	1.9	1.6
平均	3.5	2.4	1.9

表 4 主郭出土のオオムギのサイズ

LF No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
LF 3	5	3	2
LF 9	6	2.7	1.8
平均	5.5	2.9	1.9

表 5 主郭出土のアワのサイズ

LF No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	LF No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)
LF 1	1.2	1.1	0.9	LF 6	1.1	1.1	0.8
"	1.2	1	1	LF 7	1.1	1.1	0.8
"	1.1	1.1	1	"	1.3	1.2	0.9
"	1.2	1.2	1	"	1.2	1.1	0.7
"	1.3	1.1	0.9	"	1.3	1	1.1
LF 2	1.4	1.1	1	"	1.3	1.1	0.9
"	1.2	1.1	0.8	"	1.1	1.1	0.9
LF 3	1.4	0.9	0.8	"	1.4	1.1	1.1
"	1.3	1.3	1	"	1.1	1	0.8
LF 4	1.1	1	0.6	"	1.1	1	0.8
"	0.8	0.9	0.5	"	1.1	1.1	1.1
"	1.5	1	1	LF 8	1.2	1	0.6
"	1.1	1.2	0.9	"	1.1	1.1	1
"	1.4	1	1.2	"	1.3	1.1	0.8
"	1.3	1.1	0.8	"	1.1	1.1	0.9
"	1.3	1.3	1.2	LF 9	1.2	1	0.8
"	1.4	1	1.2	"	1.1	1	0.8
LF 5	1.5	1	1.3	"	1.3	1.2	1.3
"	1.4	1	1.1	"	1.3	1.2	1.3
LF 6	1.1	1.1	0.8	平均	1.2	1.1	0.9
"	1.2	1	1.1				

3 考察

近年、今帰仁城跡および今帰仁城跡周辺遺跡ではフローテーション法を用いた植物遺体回収が行われており(赤嶺・喜納2008、高宮2007、千田2009、宮城・与那嶺2005)、徐々にではあるが今帰仁城跡周辺における植物食利用が明らかになっている。しかし主郭部分に関しては今日までフローテーション法を用いた植物遺体分析は行われておらず、按司やその家族などエリート層の植物食利用について十分な理解がなされていない。そこで今回、主郭東側斜面よりサンプリングされた主郭由来の土壌をフローテーション処理し、主郭部分における植物食利用を理解するために必要となるデータ収集を試みた。双眼実体顕微鏡を用いた同定作業を行った結果、計2,248(粒/片)の植物遺体を確認した。ここでは検出された植物遺体データを基に、主郭部分の植物食利用について簡単に述べる。

まず、分析を行なった土壌サンプルからはアワ795(粒/片)、イネ279(粒/片)、コムギ66(粒/片)、オオムギ35(粒/片)の栽培植物が確認された。これらの栽培植物は外郭Ⅲ・Ⅳ区(千田2009)でも確認されていることから、城内で一般的に利用されていた植物と考えられる。これらの分析結果が主郭部分で生活していた人々の植物食利用を反映しているとするならば、主郭部分の人々はアワおよびイネを多く利用していたと推察される。また、これら栽培植物の他に堅果皮、ホルトノキ、タデ科、マメ科、カヤツリグサ科といった野生植物も確認された。なかでも堅果皮が最も多く検出されていることから、エリート層の人々も堅果類を利用していた可能性が考えられる。

今回、主郭由来の土壌から植物遺体を回収したことで、今帰仁城跡内における植物食利用を理解する上で貴重なデータを得ることが出来た。今後も城内外における継続的な植物遺体データの収集を行うと共に、主郭東側斜面や今帰仁城跡周辺遺跡より得られた植物遺体データの比較・検証を行うことで、今帰仁城跡一帯における植物食利用がより詳細に理解されるであろう。

謝辞

今帰仁城跡における主郭由来の土壌を用いた植物遺体分析という貴重な機会を与えて下さった、今帰仁村教育委員会 宮城弘樹氏に厚く御礼申し上げます。また、植物遺体の同定作業においては札幌大学 高宮広土氏から多くの助言を賜りました。なお、本報告は筆者が2008年度に札幌大学大学院文化学研究科へ提出した修士論文より一部を抜粋し、加筆・修正を加え作成したものである。

《引用文献》

- 赤嶺 信哉、喜納 政英2008 『炭化植物遺体』「今帰仁城跡発掘調査報告Ⅲ」
今帰仁村教育委員会、pp25—26. 今帰仁村教育委員会1983
- 高宮 広土2007 『今帰仁城跡周辺出土の植物遺体—西区Ⅲ区b(屋敷地Ⅱ) 出土の植物遺体—』
「今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ」今帰仁村教育委員会、pp301—309.
- 千田 寛之2009 『今帰仁城跡外廓Ⅲ・Ⅳ区出土の炭化種子分析』「今帰仁城跡発掘調査報告Ⅳ」
今帰仁村教育委員会、pp.171—178.
- 今帰仁村教育委員会1983 『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ』
- 宮城 弘樹、与那嶺 俊2005 『出土遺物の組成』「今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ」今帰仁村教育委員会、
pp.183—188.

今帰仁城跡主郭東側斜面出土の植物遺体 (1)



写真1 イネ



写真2 イネ小穂軸



写真3 コムギ
背面 腹面



写真4 オオムギ
背面 腹面



写真5 コムギ小穂軸



写真6 アワ
背面 腹面



写真7 ホルトノキ
外面 内面



写真8 タデ科



写真9 マメ科
背面 腹面



写真10 カヤツリグサ科



写真11 不明種子A
外側 内側



写真12 不明種子B

今帰仁城跡主郭東側斜面出土の植物遺体（2）



写真13 不明種子C
外側 内側



写真14 不明種子D
外側 内側



写真15 不明種子E
外側 内側



写真16 不明種子F
外側 内側



写真17 不明種子G
外側 内側



写真18 不明種子H
外側 内側



1. 空から見た今帰仁城跡周辺



2. 今帰仁城跡及び周辺遺跡

図版2
今帰仁ムラ跡（13区）



1. 今帰仁ムラ跡着手前（北から南）



2. 作業状況（北から南）



3. 調査完了状況（北から南）



4. 調査完了（南から北）



5. 埋め戻し作業状況





1. 親泊ムラ跡着手前



2. 作業状況



3. Bグリッド北側トレンチ遺構検出状況



4. Cグリッド東側トレンチ土留石積検出状況



5. Cグリッド東側トレンチ堆積状況



6. 親泊ムラ跡調査完掘状況



10-22



10-23





1. 志慶真ムラ跡調査着手前



2. 伐採後



3. SK20 検出状況



4. SK20 半裁完了状況



5. T.P.3 腐植土除去状況



6. T.P.3 完掘状況



7. T.P.4 完掘状況



8. T.P.4 東壁



1. T.P.5 III層検出状況



2. T.P.5 東壁



3. T.P.5 遺構検出状況



4. T.P.6 着手前



5. T.P.6 III層検出状況



6. T.P.6 遺構検出状況



7. T.P.6 北壁

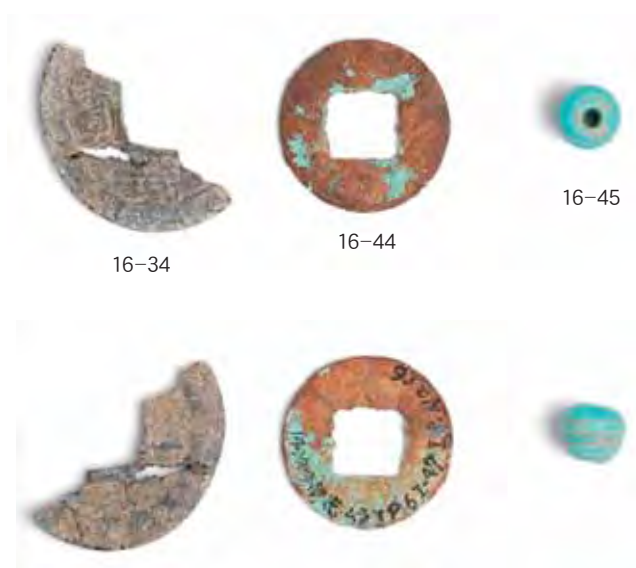


8. T.P.7 完掘状況

図版 8 志慶真ムラ跡出土遺物



図版 9 志慶真ムラ跡出土遺物・周辺遺跡表採遺物





1. 石積み遺構a検出状況（西から東）



2. 石積み遺構北側石列



3. 石積み遺構（ハンタ道から東側）



4. 平板測量作業状況



5. 現場説明会



1. 第6号石積み遺構（チンマーサ）手前がA、奥がC（北から南）



2. 第6号石積み遺構A近景（西から東）



3. 第6号石積み遺構B（北から南）



4. 第6号石積み遺構C（東から西）



5. 第6号石積み遺構C（西から東）

第V章 結 語

以上、平成19～21年度に実施した今帰仁城跡周辺遺跡について論じてきた。まとめをして結びとしたい。今帰仁城跡を取り囲む3つの集落（今帰仁ムラ・親泊ムラ・志慶真ムラ）について試掘調査を実施した。この中でも今帰仁ムラ跡は周辺整備に伴う調査によって調査した経緯があるが、今回未発掘であった親泊ムラ・志慶真ムラの調査を行い、今帰仁ムラ跡と同様にグスク時代相当の遺物や柱穴遺構を確認することができた。また、遺跡の年代や遺構も今帰仁ムラ跡と近似しており、ほぼ時を同じくして隣接する関連性の深い集落であったものと思われる。これら3つの集落は今帰仁城跡を考える上でも重要な集落であることは間違いなく、城下町的な景観をつくりだしていたものと想像することができる。

周辺遺跡に点在する石積み遺構については、これまでミームングスクやシニグンニの調査を行ってきた。ハンタ道沿いにおいて発見された石積遺構a（仮称：ナガレ庭）については明治36年に作成された「國頭郡今帰仁間切今泊全図」で褐色に着色され、祭祀的な遺構として指摘することができるが、未発掘のため今回の測量調査はあくまでも基礎的な調査と言える。資料等の情報量の少なさも相まって未だその性格については詳細不明な遺構として報告せざるを得ないが、次回調査への課題としたい。

最後に、今帰仁城跡周辺遺跡の一部が2009年7月23日に今帰仁城跡として第3次追加指定された。今回の追加指定範囲には志慶真ムラ跡は入っていないが、将来的には今帰仁ムラ跡や親泊ムラと同様に保護されるべきであろう。今後、新たな整備計画を基にして調査が進むと考えられる。

本報告が来たる本調査や遺跡整備の一助となれば幸いである。

《参考文献》

- 今帰仁村教育委員会 1992年『今帰仁城跡公園基本構想・基本計画書』
- 宮城弘樹 2006年「グスクと集落の関係について（覚書）ー今帰仁城跡を中心としてー」『南島考古第25号』
- 瀬戸哲也・ほか 2007年「沖縄における貿易陶磁研究ー14～16世紀を中心にー」
『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編
- 永井久美男 2002年『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院
- 今帰仁村教育委員会 1983年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰー志慶真門郭の調査ー』今帰仁村文化財調査報告書第9集
- 今帰仁村教育委員会 1984年『今帰仁村の遺跡』今帰仁村文化財調査報告書第10集
- 今帰仁村教育委員会 1991年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱー主郭（俗称本丸）の調査ー』
今帰仁村文化財調査報告書第14集
- 今帰仁村教育委員会 1986年『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』今帰仁村文化財調査報告書第12集
- 今帰仁村教育委員会 2005年『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱー今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告ー』
今帰仁村文化財調査報告書第20集
- 今帰仁村教育委員会 2006年『史跡 今帰仁城跡ー外郭発掘調査概報ー』今帰仁村文化財調査報告書第23集
- 今帰仁村教育委員会 2007年『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲー村内遺跡発掘調査報告ー』今帰仁村文化財調査報告書第24集
- 今帰仁村教育委員会 2008年『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅲー今帰仁ムラ跡西区屋敷地5の調査ー』
今帰仁村文化財調査報告書第25集
- 今帰仁村教育委員会 2009年『今帰仁城跡周辺遺跡』今帰仁村教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2007年『渡地村跡ー臨港道路那覇1号線に伴う緊急発掘調査報告ー』
沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第46集
- 沖縄県教育委員会 1998年『首里城跡ー京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）ー』沖縄県文化財調査報告書第132集
- 崎浜靖 2008年「北山（山原）の歴史と文化」《今帰仁村指定文化財指定記念事業特別解説会》
『今帰仁村文化講座資料』2008年2月23日（口頭発表資料）

報 告 書 抄 録

ふ り が な		なきじんじょうせきしゅうへんいせき4						
書 名		今帰仁城跡周辺遺跡 IV						
副 書 名		村内遺跡発掘調査報告書						
巻 次								
シ リ ー ズ 名		今帰仁村文化財調査報告書						
シ リ ー ズ 番 号		第28集						
編 著 者 名		玉城靖・宮城弘樹・與那嶺俊・黒沢健明・千田寛之						
発 行 機 関		今帰仁村教育委員会						
所 在 地		〒905-0401 沖縄県今帰仁村字仲宗根232 TEL0980-56-3201						
発 行 年 日		西暦2010年3月31日（平成22年）						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
なきじんじょうあと 今帰仁城跡 しゅうへん いせき 周辺遺跡	なきじん 今帰仁村 いまどまり 字今泊	473065		26°41'34"	127°55'41"	19年度 20年度 21年度	13次 (43m ²) 14次 (32m ²) 15次 (40m ²) 17次 (362m ²) 18次 (約700m ²)	村内遺跡発掘調査事業に係わる 範囲確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
今帰仁城跡 周辺遺跡 ・今帰仁ムラ跡 ・親泊ムラ跡 ・志慶真ムラ跡	集落	グスク時代 (13世紀から 16世紀)	石積遺構 柱穴 土坑 溝 土留石積み ほか	グスク土器 カムイヤキ 中国陶磁器 青磁 白磁 青花 褐釉陶器 沖縄産陶器 本土産陶磁器 玉類 銭貨 金属製品 等			今帰仁城跡の南北に所在する城下町的な集落を確認。 併せて今帰仁城跡周辺に所在する石積遺構の測量調査も実施。	

今帰仁村文化財調査報告書第28集

今帰仁城跡周辺遺跡Ⅳ

発行 2010年 3月31日
今帰仁村教育委員会
沖縄県今帰仁村字仲宗根232
TEL 0980-56-3201

印刷 沖縄高速印刷株式会社
沖縄県南風原町字兼城577
TEL 098-889-5513
